

當代遺跡・大ネギ遺跡

山梨県立博物館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書

2003. 3

山梨県教育委員会

當代遺跡・大ネギ遺跡

山梨県立博物館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書

2003. 3

山梨県教育委員会

序 文

本書は、山梨県立博物館（仮称）建設予定地内に存在が予想された遺跡の確認と、その結果確認された遺跡の本調査の報告書であります。

今回は、建物建設予定地のみならず、緑地や駐車場まで含めたすべての対象地、約63,000m²についての試掘を実施し、遺跡の範囲とその内容を把握することを目的とした試掘調査から開始いたしました。試掘は対象区域すべてに重機によるトレーナーを入れ遺構・遺物の有無や量を確認する方法で実施し、本調査区域を絞り込むこといたしました。

隣接する教育センター敷地が地耕免遺跡として調査され、平安時代の住居跡や溝が確認されていたこともあって、今回も同時期の遺構・遺物が予想されておりましたが、試掘調査の結果、地耕免遺跡は今回の対象地域にまでは伸びておらず、また、新たに発見された遺跡もごく小規模であることが確認されました。

本調査の対象となったのは、対象域東端に確認された縄文時代前期末の當代遺跡と、建物本体の予定地に存在した平安時代の大ネギ遺跡で、前者からは住居跡1軒、後者からは溝1条が検出されました。當代遺跡の縄文時代の住居跡は県内ではきわめて類例の少ない前期終末期の住居跡で、特殊な形態の炉や石器の使用状況が復元される貴重な資料が得られました。また、大ネギ遺跡では幅1mたらずの溝から多くの土師器や灰釉陶器などとともに、これも類例の少ない土錘がまとまって出土しております。このようにいずれの遺跡も地域の歴史解明に貴重な資料を提供することとなりました。

本報告書が多くの方々の研究資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、ならびに発掘調査・整理作業に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2003年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

例　　言

- 1 本書は、山梨県立博物館（仮称）建設予定地内に所在が予想された遺跡確認のための試掘調査と、確認された遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は県教育委員会が実施した。
- 3 試掘調査、本調査及び出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行った。試掘調査は長沢宏昌・大柴鉄哉・浅川一郎・田口明子が、本調査及び出土品の整理は長沢・大柴が担当した。なお、本調査のうち當代遺跡については、遺跡が博物館建設による町道の切り回し区域に位置したことから、町道区域については地元である御坂町教育委員会が調査主体となるという事前の協議に従い、御坂町教育委員会望月和幸が担当し、長沢・大柴がこれを補佐した。
- 4 本報告書の編集は長沢が行った。第1章・第2章を大柴が、第3章～第5章・第7章を長沢が執筆した。なお、自然科学分析は（株）パリノサーヴェイに委託し、その成果は第6章に示した。
- 5 写真撮影は、長沢・大柴・望月がおこなった。
- 6 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序	
例言・凡例	
第1章 調査の概要	1
第2章 調査区域周辺の環境	2
第3章 試掘調査	5
第4章 當代遺跡の調査	13
第5章 大ネギ遺跡の調査	21
第6章 自然科学分析	37
第7章 若干の考察	39

挿図目次

- 第1図 調査区域周辺の遺跡
第2図 トレンチ位置図
第3図 トレンチ断面図その1
第4図 トレンチ断面図その2
第5図 91トレンチ内弥生土器出土状況
第6図 試掘トレンチ出土遺物その1
第7図 試掘トレンチ出土遺物その2
第8図 當代遺跡位置図及び全体図
第9図 當代遺跡住居跡・炉
第10図 當代遺跡住居跡出土遺物その1
第11図 當代遺跡住居跡出土遺物その2
第12図 當代遺跡住居跡出土遺物その3
第13図 當代遺跡住居跡出土遺物その4
第14図 大ネギ遺跡位置図及び全体図
第15図 大ネギ遺跡溝遺物出土状況
第16図 大ネギ遺跡出土遺物その1
第17図 大ネギ遺跡出土遺物その2
第18図 大ネギ遺跡出土遺物その3
第19図 大ネギ遺跡出土遺物その4
第20図 大ネギ遺跡出土遺物その5
第21図 大ネギ遺跡出土遺物その6
第22図 大ネギ遺跡出土遺物その7
第23図 大ネギ遺跡出土遺物その8
第24図 大ネギ遺跡出土遺物その9
第25図 大ネギ遺跡出土遺物その10
第26図 當代遺跡台石・蔽石・石皿・磨石
第27図 桂野遺跡台石・蔽石・磨石
第28図 県内出土土錐その1
第29図 県内出土土錐その2

表目次

表1 遺物観察表

表2 県内出土土錐一覧表

図版目次

- 図版1 1 試掘風景 2 試掘風景 3 32号トレンチ 4 36号トレンチ 5 59号トレンチ
図版2 1 60号トレンチ 2 62号トレンチ 3 · 4 91号トレンチ弥生土器出土状況 5 111号トレンチ断面 6 125号トレンチ断面
図版3 1 當代遺跡遺物出土状況 2 炉と台石 3 炉断面 4 炉と台石 5 炉断面 6 炉断面
図版4 1 · 2 · 3 · 4 大ネギ遺跡溝遺物出土状況 5 溝完掘状況
図版5 1 91号トレンチ弥生土器 2 トレンチ出土遺物
図版6 1 當代遺跡住居跡炉体土器 2 當代遺跡住居跡出土土器
図版7 1 · 2 · 3 當代遺跡住居跡出土蔽石
図版8 4 當代遺跡住居跡出土稲磨石 5 台石と蔽石 6 石皿
図版9 7 台石に見られる小さな窪み
図版10 1 大ネギ遺跡溝出土土師器
図版11 2 大ネギ遺跡溝出土灰釉陶器
図版12 3 大ネギ遺跡溝出土灰釉陶器
図版13 4 · 5 大ネギ遺跡溝出土須恵器
図版14 6 大ネギ遺跡溝出土綠釉陶器 7 大ネギ遺跡溝出土ミニチュア土器
図版15 8 大ネギ遺跡溝出土土錐 9 大ネギ遺跡溝出土不明土製品 10 大ネギ遺跡溝出土水晶製石繖 11 大ネギ遺跡溝出土砥石
図版16 當代遺跡住居跡炉内出土微細遺物

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

山梨県立博物館（仮称）建設に先立って、平成14年5月13日より工事の着工が予定されている全域にわたって試掘調査を実施した。試掘は、1m×20mの試掘溝（トレンチ）を約5m間隔で任意に設定し、掘り下げを行った。総面積約63,000m²を調査対象とし、131本の試掘溝（トレンチ）を入れて調査した。8月より本調査を開始した。なお、この段階で用地未買収であった部分についても段階的に試掘を行い、平成15年1月14日に最後の試掘を実施し、トレンチは141本となった。

本調査は、平成14年8月1日～8月27日の約1ヶ月にわたって実施し、基礎整理事業は平成14年9月1日～10月31日、本格的整理作業は平成14年11月1日～平成15年3月まで実施された。

なお、文化財保護法に基づく手続きは以下の通りである。

- 平成14（2002）年4月 調査対象域（地耕免遺跡）の発掘通知（試掘）を文化庁長官に提出
- 平成14（2002）年6月 調査対象域（地耕免遺跡）の埋蔵文化財発見通知を甲府警察署長に提出
- 平成14（2002）年7月 當代遺跡・大ネギ遺跡の発掘通知（本調査）を文化庁長官に提出
- 平成14（2002）年8月 當代遺跡・大ネギ遺跡の埋蔵文化財発見通知を甲府警察署長に提出

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 長沢宏昌（県文化財主事）
田口明子（県文化財主事）
大柴鉄哉（県文化財主事）
浅川一郎（県文化財主事）
望月和幸（御坂町教育委員会）

作業員 大塚昭六、鈴木初音、田辺秋太郎、飯島澄子、相澤淑美、須田良子、宮久保あさの

整理作業員 富永茂樹、志田幸江、正木なつ子、萩原里江子、栗原教子、栗原礼子、岡和子、佐々木富士子

第2章 遺跡周辺の環境

當代遺跡、大ネギ遺跡の所在地御坂町は、甲府盆地の東部、笛吹川の左岸で、黒岳、御坂山など御坂山塊の西麓に位置する。御坂山塊より斜面を北西に流れる金川の流域に沿ってなだらかな傾斜の扇状地が形成されており、本遺跡はその先端に位置する。標高は當代遺跡が284m、大ネギ遺跡が282mである。

本遺跡のある扇状地は甲府盆地の陥没によって成立した断層崖下に、金川の運搬による土砂の堆積によって形成されたものである。この堆積層はきわめて厚く、そのため表流水は少ないが、地下伏流水は豊富である。その地下水位は扇尖部から先端部にかけて次第に浅くなり、そのため扇状地の先端部では、地下水位が地表面より浅くなったところから、地下水が湧水として噴き出しているところが多く認められる。これらの多くは、近年の開発に伴い枯渇てしまっているが、この湧水はかつて表流水とともにこの地域の農耕や生活にとって重要な意味を持っていたのである。

本遺跡付近の縄文時代の遺跡は、花鳥山傾斜地にある花鳥山遺跡（42）、天川右岸の八千藏諂訪の原遺跡（41）等を中心に遺跡群が濃密に分布している。弥生時代の遺跡は、一丁田中遺跡（36）、下成田遺跡（5）等を中心に黒駒荒神原、下野原、金川原、八千藏等にも地表面に土器片が広く分布していることが認められている。

甲斐国における古墳文化は、4～5世紀あたりまで中道町の銚子塚古墳、大丸山古墳等が所在する曾根丘陵一帯を中心とし、その後その周辺に拡散したと考えられている。本遺跡付近の古墳は、扇状地の扇尖部に濃密に存在している。そのうち下井上の南照院境内には、東日本の後期古墳を代表する姥塚（21）がある。本墳は古来より有名で、『甲斐国志』には「圓通窟、大馬塚と称し、洞口九尺、深十二間、弘法作といわれる正觀音像を安置す」と見えている。また本墳をめぐる伝説は様々あって、その一つに聖德太子伝説がある。それは太子が甲斐に入ったとき、この地で愛馬が倒れ、その馬を葬ったのがこの塚で、「御馬塚」といったという。御馬塚（おんばづか）が姥塚（おんばづか）に転訛したもので、この塚の前にはそのため太子の鞍掛石というのもある。本墳の構造形式は、円墳、横穴式石室を有し、現在の塚の高さは10m、基底周囲157mである。石室の材石は自然石を用い、加工石は全く用いられていない。内部の大きさは、羨道入り口の幅2.1m、高さ2.5m、長さ7.5m、玄室の方は幅3.0m、高さ2.8～3.4m、長さ7.5mあり長軸は実に15mある。なお本墳はいつ發掘されたのか明らかでなく、出土遺物などについても全くわかっていない。しかしその広大な墳丘と、内部構造の巨大さは、甲府市千塚の加牟那塚と双壁をなし、しかもその雄大な構造は東日本随一と折り紙がつけられている。本墳の築造された時代と同時期の遺跡として、姥塚遺跡（21）と二之宮遺跡（20）があげられる。姥塚遺跡は姥塚古墳のすぐ南にあって、一部同一小字名も含まれることから、この遺跡名がつけられたのである。この遺跡からは140軒を越す住居跡が確認され、姥塚古墳築造に関係した大集落であるというだけでなく、奈良、平安時代の国衙とも近接していることで注目されている遺跡である。またすぐ西には二之宮遺跡がある。この遺跡からは400軒を越す住居跡が確認され、古墳時代始め頃から平安時代末頃まで連続と続いた伝統的集落跡と考えられる状況から、姥塚古墳と切り離して考えることはできない。

花鳥山一帯にある日本武尊伝説、二之宮にある美和神社の社記、あるいは『日本書紀』や『扶桑略記』所載の甲斐の黒駒の記事などによって、本遺跡周辺地域は、鎌倉街道という中央文化の流入経路の要衝にあり、八代、一宮、石和、春日居などとともに、当時の甲斐の国の政治、文化の中心地であったと考えられる。こうした時代を経て8世紀の初頭、大宝律令の公布に伴い、新しい国郡制が布かれたが、本県は東海道に属する一国として甲斐国となり、政治の中心地には国庁がおかれた。また行政区画として国、郡（評）、里（郷）が構成され、郡は山梨、八代、巨麻、都留の四郡に分けられた。本遺跡周辺に所在した古代の郷「井上郷」「八代郷」「玉井郷」「林戸郷」「野呂郷」等は、すべて山梨郡に属していたことが「和名抄」に明記されている。国庁の所在地については、春日居町の国府、一宮町の国分、御坂町の国衙をめぐって諸説があるが、はじめ春日居町に設けられた国庁が、笛吹川の氾濫から逃れるために一宮町に移転し、さらに承平年間に金川の氾濫や交通路の



第1図 調査区域周辺の遺跡

移動等の理由から御坂町国衙に移ったものと考えられている。

本遺跡は、以前調査された地耕免遺跡（3）に隣接しているため、当初その一部であろうと推測された。地耕免遺跡からは、平安時代の遺物が出土している。当時の農村は、「かたあらし」とよばれるように、耕地は放棄されて荒廃したものが多く、作物の収穫量は耕地全体の三割強であったといわれている。その背景には律令体制の矛盾の展開によって、多くの班田農民層が逃亡や浮浪化により、在地から流失していったことが挙げられる。彼らは、在地の富豪層や国司などの開発のための労働力として、新たに定着と耕作を開始し始めていた。こうして、富豪層や国司らは、「かたあらし」といわれる荒廃した耕地を再開発し、作物の収穫量を増加させることを目指した。しかし、平安時代は次第に気温上昇した時期であり、旱魃などの被害が頻発したほか、洪水なども多く起こるなどの異常気象が続いた時代でもあった。それが疫病の流行の呼び水ともなり、またこれが当時の人々には政変によって亡くなったり多くの政治家達（早良親王や菅原道真など）の怨念という迷信と結びつき、「ヤスライ」や「天神」などの怨靈信仰が流行するきっかけとなった。旱魃と水不足に悩む一方で、一度降り始めれば洪水を引き起こすほどの大雨にさらされる当時の人々にとって、農耕は天候との戦いであり、それを神々のなせる業とみなした彼らは、その鎮めの祈りを込めて、様々な祭礼を各地で展開した。「ヤスライ」＝「牛頭天王」をまつる祇園祭などが始まったのはこのような最中のことである。

このような時代背景のもとで、地耕免遺跡からは、雨乞いに際して使用されたと思われる遺物と動物遺体が発掘された。まず遺物として確認されたのは、「斎串」で、杉、桧を素材とし、大きさは200～500mm、幅5～15mm、厚さ5～10mmで、両端を尖らせたり、切断したりしてあり、さらに焼いた跡が見受けられた。これを水路の特定の場所に刺して、神の代依＝降臨の場とする意図があったと考えられる。これに生け贅として馬や牛を殺してその首を斎串を刺した水路に投げ込み、雨乞いを行ったと考えられている。なぜ馬を殺して供えたのかについては、馬は龍の化身と考えられており、龍は水神と考えられていたので、水に関わる祈りに供えられたのではないかと推測することができる。「当時の民衆は富豪層の影響下に置かれ、彼ら主催の殺馬・殺牛儀礼＝祈雨・止雨祭礼が行われていた」と『日本靈異記』に見られる。特に馬は当時大変高価であり、「下馬」でも「三百束」と『延喜式』に見られるので、それを殺して供えるという祭祀を主催できるのは、やはり相当な有力者であったことは間違いない。

少し下って11～12世紀に整備される諸国一宮制により、美和神社が甲斐二宮に位置づけられたことは、この地域が国衙、郷、一・二・三宮制によって強く結びつけられていたことを示している。それはこの周辺の郷が、その後も国衙領として国衙と深く結びついており、平安～鎌倉期に至るまで荘園の成立を拒み、また鎌倉期に台頭してくる甲斐源氏の勢力進入を拒み続けた地域であることから考えて、十分推測できるのである。

周辺の遺跡

1當代遺跡、2大ネギ遺跡、3地耕免遺跡、4二宮条里遺構、5下成田遺跡、6亀甲塚、7山王遺跡、8赤目田遺跡、9扇田遺跡、10後田遺跡、11中通遺跡、12宮の後遺跡、13赤根田遺跡、14首中根遺跡、15下原遺跡、16田代遺跡、17御幣遺跡、18橋詰遺跡、19鍬柄田遺跡、20二宮遺跡、21姥塚古墳・姥塚遺跡、22天神前遺跡、23不動原遺跡、24出口遺跡、25東田遺跡、26下平井条里遺構、27上平井条里遺構、28下前田御堂、29御堂遺跡、30満中田遺跡、31宮の上遺跡、32大原遺跡、33坪井坂上遺跡、34赤井遺跡、35中川松本遺跡、36一丁田中遺跡、37御幸道遺跡、38宮の前遺跡、39狐原遺跡、40茶かん遺跡、41八千藏諒訪の原遺跡、42花鳥山遺跡

第3章 試掘調査

第1節 トレンチの状況

今回の試掘は、遺跡の範囲を確認して本調査区域の絞り込みを行うと同時に、破壊されずに残される遺跡の内容確認も目的としていたため、駐車場や緑地までも含んだ博物館敷地内すべてである63,000m²を対称として行ったものである。当初は5・6月で充分終了する予定であったが、用地取得の関係から最終の試掘終了は年明けの平成15年1月14日であった。

試掘は用地買収後の立木伐採が終了した部分から順次実施していった。そのため、トレンチ番号は飛び飛びにならざるを得なかった。調査は重機によりバケット幅(約1m)でトレンチを掘り断面の確認と遺物の回収を行う方法で、必要に応じて拡張区を設定した。

第2図に示した太線が博物館敷地外郭線である。試掘調査開始時は既調査の地耕免遺跡が対象域に延びているものと予想し、地耕免遺跡の範囲確認が主体となると考えていたが、地耕免遺跡は対象域にまでは延びていないことが明らかになった。トレンチは敷地内すべてを網羅するように配置したが、用地買収の状況から多少の粗密がある。しかし、その場合も周辺のトレンチの状況から遺跡の有無を判断しており、遺跡の確認漏れはないと判断した。そして、最終的には南東端の當代遺跡と建物本体にあたる大ネギ遺跡を本調査の対象にすることとしたのである。

図に示したように、最終的には141本のトレンチを入れたが、すべてのトレンチにおいてセクション図を作成した。本報告書ではそのうちのいくつかの概要を記すことにするが、図中のトレンチの太線部分が断面図作成の位置を示している。

第2図から明らかなように、外郭線で囲まれた敷地部分の現状は東西に走る2本の道路によってほぼ3分割されている。その道路には小河川が併走しており、3分割されたそれぞれが東西に伸びる小尾根状を呈していることが窺われる。なお、傾斜は東から西へ緩やかに下っている。地耕免遺跡(現山梨県教育センター)の範囲がNo80~100のトレンチ部分に伸びていることを予想していたにもかかわらず、この部分でほとんど遺物が確認できなかったのも微地形から尾根が違っていたためと判断される。

第3・4図にいくつかのトレンチの断面図を示した。扇状地端部であることに加え、尾根の違いや、その後の土地利用の違いなどから、隣接するトレンチでも断面状況が著しく違う状況が認められ、基層の把握が困難ではあったが、各トレンチの状況から判断した基本層序が第4図の最後に示した基本層序模式図である。

上部からI層=耕作土・II層=褐色土(水田底土)・III~V層=灰色もしくは暗灰色砂質土・VI層=暗灰色粘質土・VII層=シルト層と砂層の互層・VIII層=砂疊層となっている。VII層はシルト層を含むところと含まないところがあり、また部分的に泥炭が形成されている部分もある。このうち遺物が含まれるのはIII~VII層であるが、出土量は多いとは言えず、摩滅した資料も含まれている。各トレンチは必ずしもこのすべての層を含むものではなく、また、砂層でも疊の混ざり具合が基本層序のものと一致しないケースがあるが、基本的理屈は第3・4図の堆積状況と判断した。

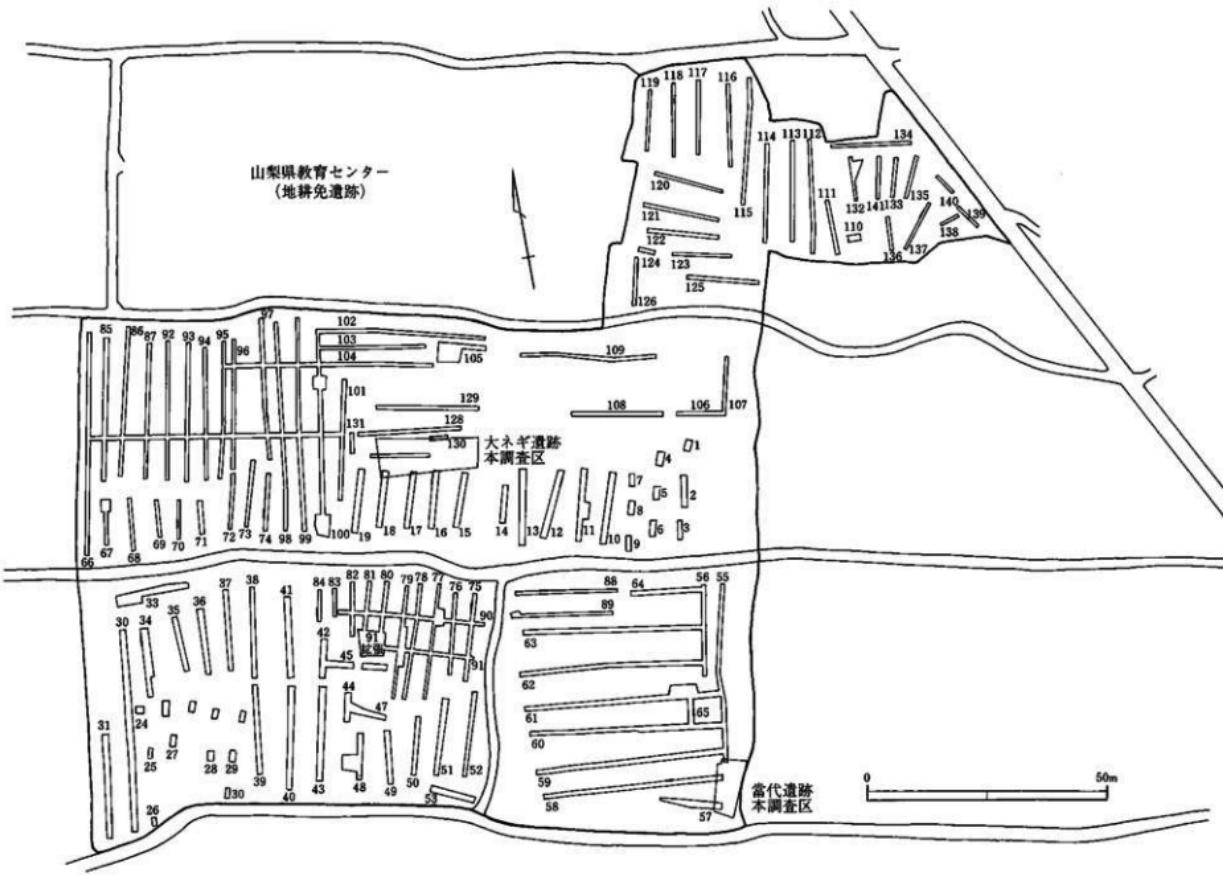
2・5・7・10トレンチを結ぶように幅0.5~1m、深さ約0.1mの溝が確認されている。内部からは僅かではあるが平安時代の土師器小破片が出土している。平安時代の溝の可能性も否定できないが、遺物の出土量がごくわずかであることと資料が著しく摩滅していたこともあって、本調査の必要はない判断した。

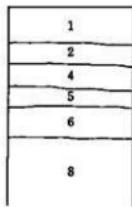
11トレンチでは時期不明の土坑1基が確認され、さらにその周辺に焼土が散布していた。トレンチ西側は畠境で段差が強いために東側にのみ拡張したが、新たな構造や時期・性格の決め手となる遺物は確認されなかつた。

48トレンチでは幅3m、深さ1m程の溝状落ち込みが確認され、この部分も拡張した。土師器や灰陶器の破片が確認されたものの、暗渠による擾乱が深く入っていることと、48トレンチの両隣である43トレンチや49

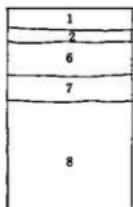
第2図 トレンチ位置図

- 6 -

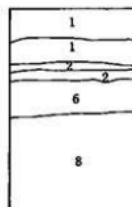




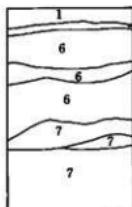
トレンチ2



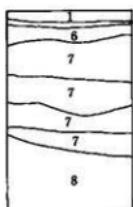
トレンチ12



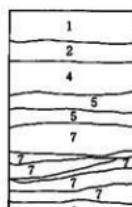
トレンチ16



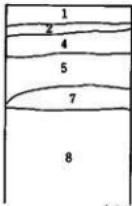
トレンチ31



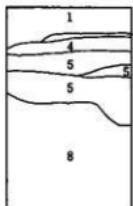
トレンチ34



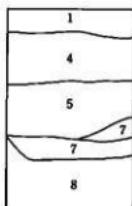
トレンチ58



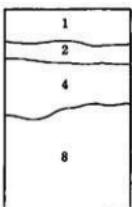
トレンチ65



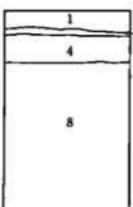
トレンチ66



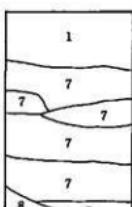
トレンチ70



トレンチ74



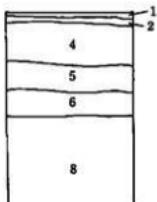
トレンチ75



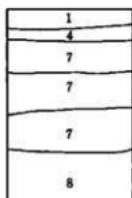
トレンチ84

0 1 m

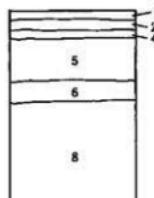
第3図 トレンチ断面図その1



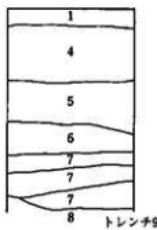
トレンチ87



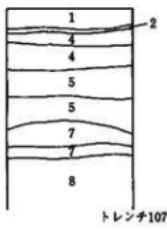
トレンチ88



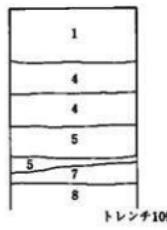
トレンチ93



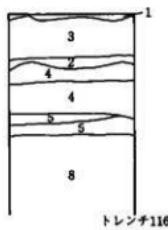
トレンチ97



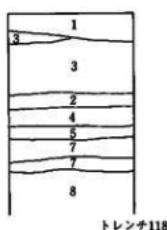
トレンチ107



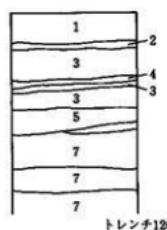
トレンチ109



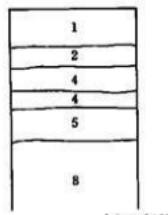
トレンチ116



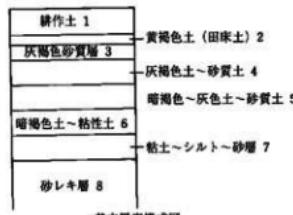
トレンチ118



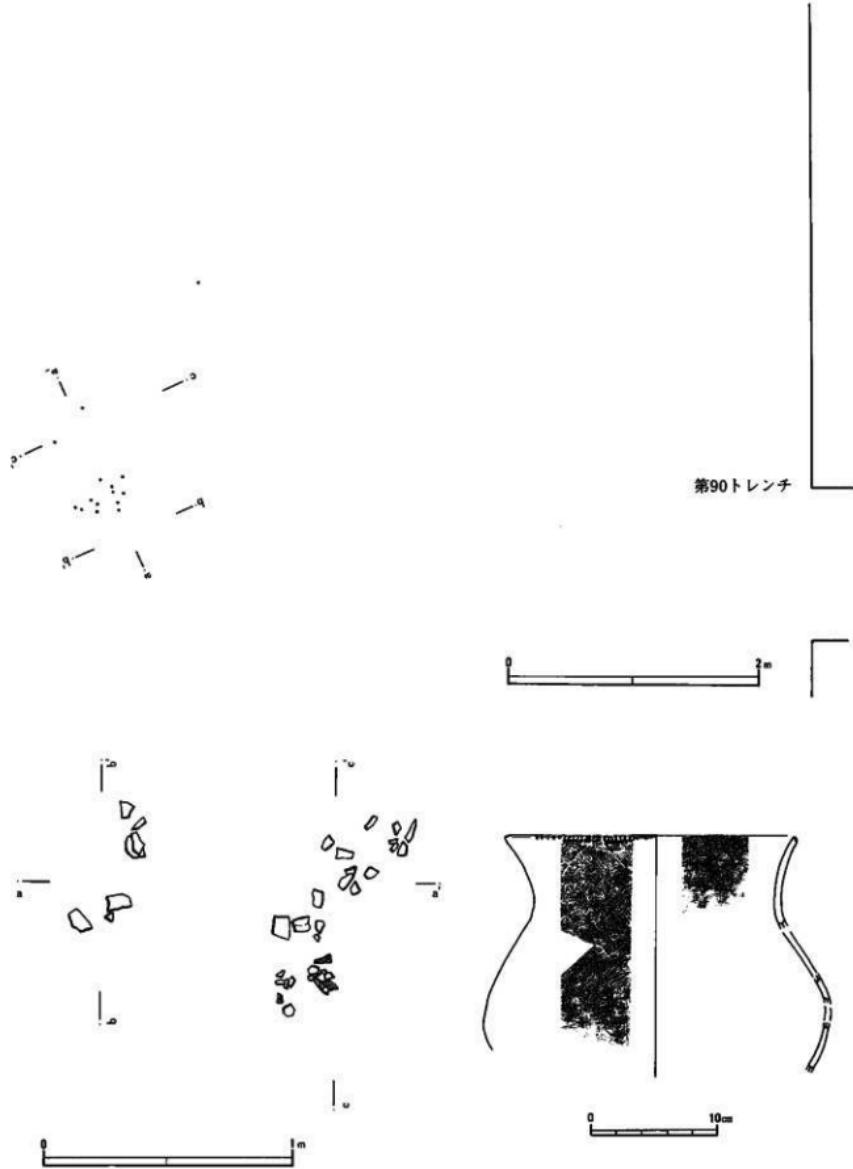
トレンチ126



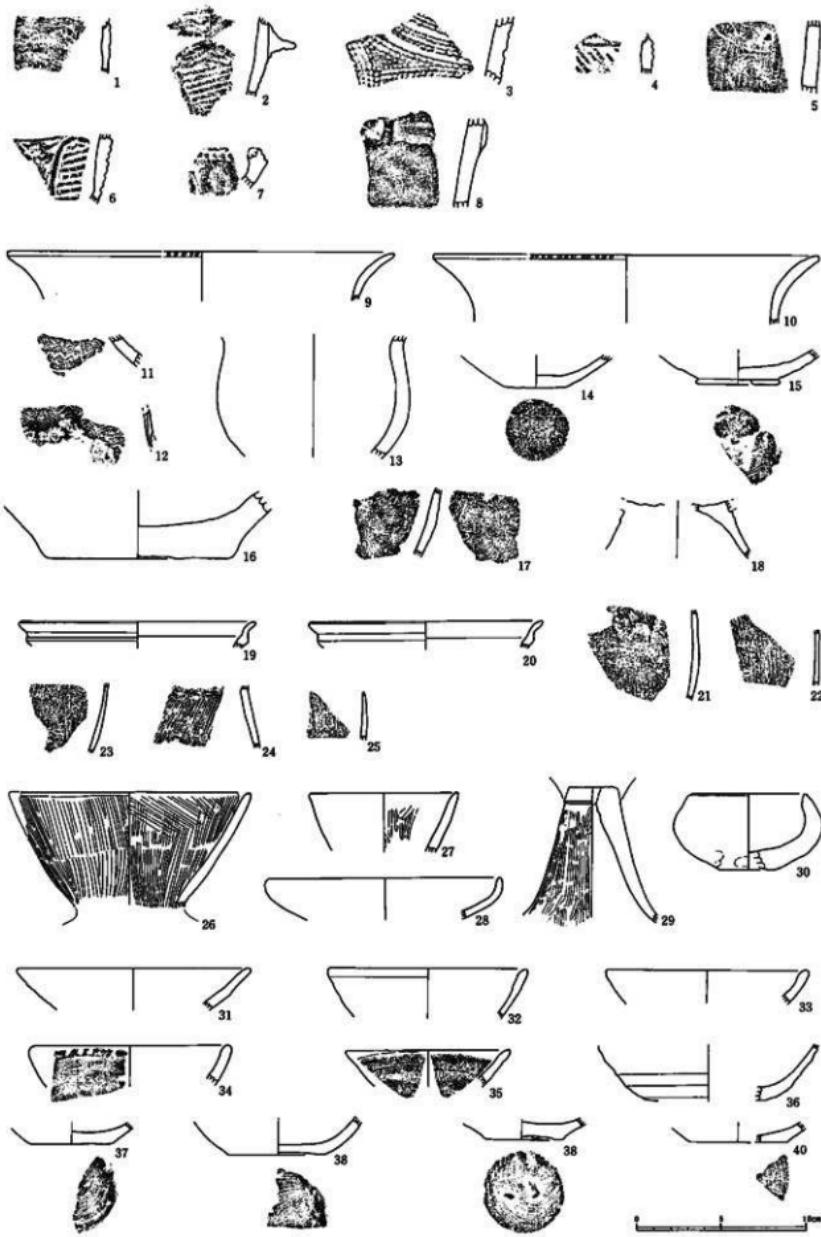
トレンチ137



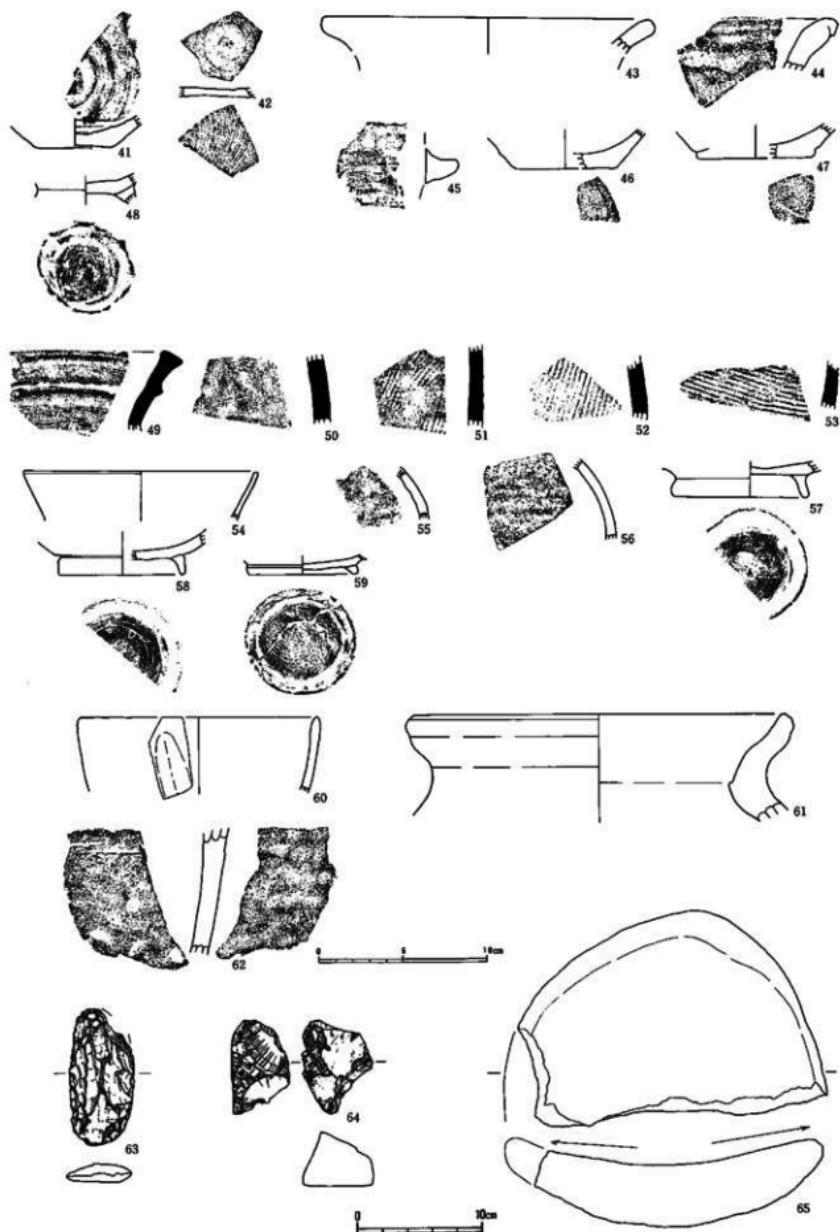
第4図 トレンチ断面図その2



第5図 91トレンチ内弥生土器出土状況



第6図 試掘トレンチ出土遺物その1



第7図 試掘トレンチ出土遺物その2

トレンチでは溝らしき落ち込みが確認されなかつたことなどから、これも本調査の必要なしと判断した。

91トレンチは東西方向に20mの長さで設定したトレンチであるが、西端で遺物の集中が見られたため急遽その周辺を拡張して調査を実施した。第5図に微細図と出土遺物を示したが、弥生土器1個体が細片となって集中していた。土器片は1.5m×1mの範囲に散っていたが、遺構としての掘りこみはその段階では確認されなかつた。また、周辺に焼土やカーボンの飛散もなかつた。さらにその周辺を広く調査したが、弥生土器は拡張区のなかでもこの集中区域以外では数片の確認に過ぎず、まさにこの場所にのみ確認されたものといえる。掘りこみが確認されなかつたため土坑と判断することもできなかつたのであるが、細片の高低差が最大で30cm程あり、その状況からは土坑の出土状況と同じと判断できる。のことから、砂層中に掘り込まれた土坑に同質の砂が覆土で堆積していたために掘りこみが検出できなかつた可能性が大きく、土坑が存在し、土坑中に細片が撒かれたものと判断しておく。なお、細片の土器は口径23cm、胴部最大計28cmの壺で、口唇部には櫛状工具による刻み、口縁部～頸部には櫛描波状文、胴部及び内面にはハケ目が施されている。後期前半に位置付けられる。

第2節 出土遺物

各トレンチからの出土遺物のうち、施文のはっきりしたものや形態の判断可能なものを第6・7図に示した。以下に概要を記すが、詳細は観察表に示す。

縄文土器は非常に少ない。1～8に示したが、1は薄手の含繊維土器で、縁の摩滅や剥離がひどく一見口縁部にも見受けられるほどである。早期末に位置付けられよう。2・3は前期末、4～7は中期初頭、8は後期前半である。

弥生土器も少なく9～18に示した。12は91トレンチの拡張区出土で、前述の弥生土器と同じ位置から出土しており、同一個体であろう。9・10・13も同じ拡張区からの出土であるが、復元資料とは2mほど離れて確認された。しかし、9・10は口唇の刻みが同一工具によるもので、これらも復元資料と同一個体の可能性がある。その場合、暗渠により搅乱を受けていたことから位置が動いたものと判断される。13は赤彩された胴部であり、明らかに復元資料とは別個体である。

古墳時代のS字状台付壺も2ヶ所で確認された。19・20・24が91トレンチ拡張区で、21・22・23・25は77トレンチでの確認である。77と91トレンチは交差していることからも明らかなように近接している。この付近に何らかの生活の痕跡があったものと思われるが、遺構は確認されていない。古墳時代中期に下る資料は表面採取も含め26～30の5点を提示する。このうち26・27は壺の口縁部片で、やはり77トレンチからの出土である。

31～48には平安時代の土師器をまとめた。今回の試掘調査で最も多く確認された資料が平安時代の土師器である。器種には壺・高壺・甕・羽釜が確認される。34は壺の口縁部片である。胎土には当地の土師器の特徴である赤色粒子を含んでおり、在地製品であることがわかる。口縁形態や厚さから、通常は平安時代末頃と判断されようが、口唇部に刻みを有するという、この時期としては考えられない手法が用いられており、判断に迷うところである。

49～53には須恵器、54～59には灰釉陶器を示した。いずれも平安時代に位置付けられるものであろう。

60は青磁碗、61は素焼きの大甕、62は常滑に類似した大甕である。中世に位置付けられようが、61はさらに新しく位置付けられる可能性もある。

石器は非常に少なく3点のみである。いずれも縄文時代で、63は粘板岩製の打製石斧、64は黒曜石のコア、65は安山岩の石皿である。

第4章 當代遺跡の調査

當代遺跡は博物館敷地南東端に新たに発見された遺跡である。試掘調査段階では縄文時代前期末の土器が数点出土した程度であったため、本調査までは考えていなかったが、念のために併行して設定した買収対象地と民有地との境界部分のサブトレーナーで遺物の散布が明らかに濃くなつたため本調査の対象にすることとした。55トレーナーの南端に位置することになるが、本調査区域から北側の55トレーナーでは、明らかに土層が違い、遺物もほとんど出土しないことから、本調査区域を第8図のように限定した。

第8図下段に示した全体図には出土遺物の分布状況も示してあるが、後述する住居内以外からの縄文土器・石器の出土量はごく僅かであったため、本報告書ではこれらの遺物については割愛した。

遺跡は、小尾根の南側斜面に確認されたことになるが、元々は北側斜面側にさらに統一していたものと思われる。土層が違った状況からも何らかの理由で遺跡面が削られ、南側にのみ残ったと判断される。また、東西の広がりで考えるなら、傾斜下部にあたる西側では遺物の分布がほとんどないことから、この部分が遺跡の西端と判断される。したがって、遺跡はこの部分から東側に展開していることが予想される。なお、現在、敷地との境界から東は桃畠となっているが、その桃畠一枚隔てた東側はすでに宅地となって開発されている。

今回の調査は本調査部分の面積が少ないため、博物館基準点を基準として4本の杭を設定し調査することとした。杭1~4は以下のように設定した。博物館基準点TA10-1 (X=-40407.821, Y=13806.885) に測量機械を設置して基準点TA11 (X=-40401.602, Y=13763.359) を見通し、基準ラインを設定した。TA10-1から時計回り方向に振って4本の杭を設置した。TA10-1基準点からそれぞれの杭のデータは以下の通りである。杭1 = 70° 33' 30" · 17.800m、杭2 = 57° 01' 50" · 21.100m、杭3 = 70° 13' 33" · 29.148m、杭4 = 83° 38' 10" · 27.677m。

これらの基準杭で遺物の全面取り上げを行ったが、前述したように縄文時代の遺物はほとんど住居部分に限られていた。

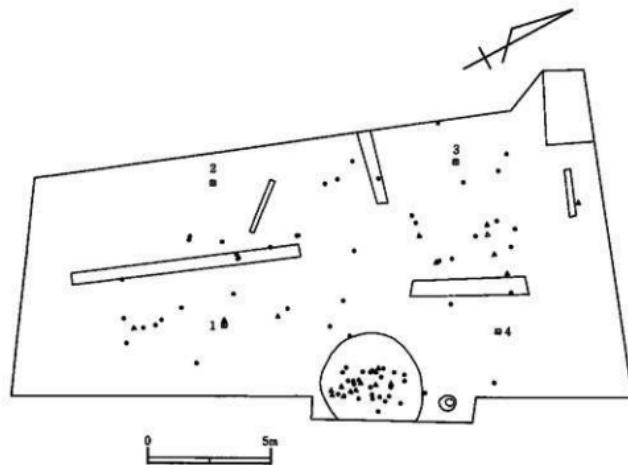
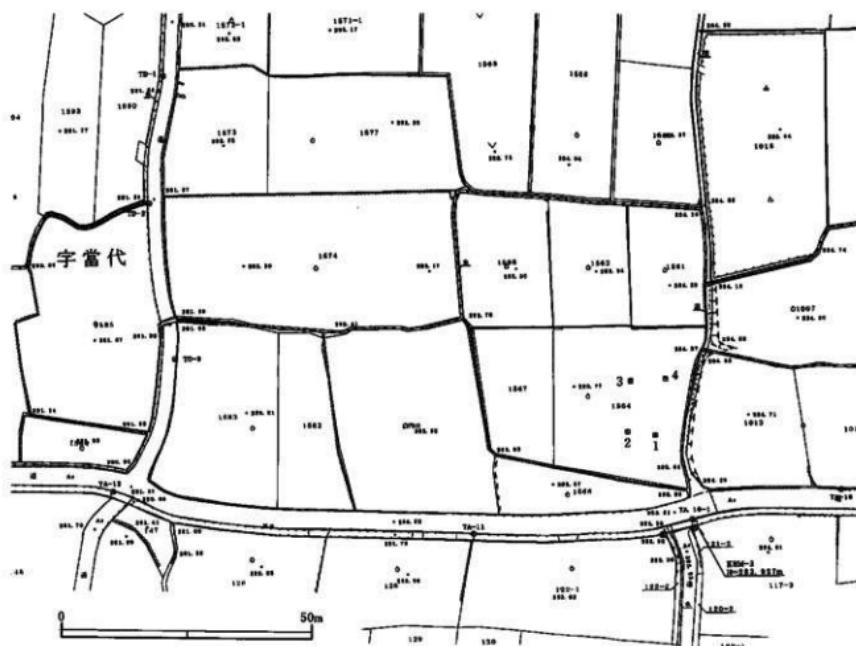
さて、今回の調査で確認された遺構は、第9図に示した住居跡1軒と土坑1基である。住居跡は壁の立ち上がりが全く確認されなかつたため、確認された柱穴と思われるピットから想定して直径約3.5mの円形と推定した。ピットは2基であり、南側が径・深さとも30cm、北側が径・深さとも20cmを計る。床面はきわめて軟弱で確実な面を捉えることはできなかつたが、埋甕炉と台石の存在から現状で間違いないものと思われる。炉の周辺以外に焼土の飛散は認められない。

炉は推定される住居のほぼ中央部に位置すると考えられるが、炉北側30cmに45×40cmの台石が置かれていた。台石周辺からは特に石材の碎片が出土しているわけではないことから、植物質に対する作業・加工台であったと想定される。なお、炉内の土壤の水洗選別結果について第6章に報告されている。

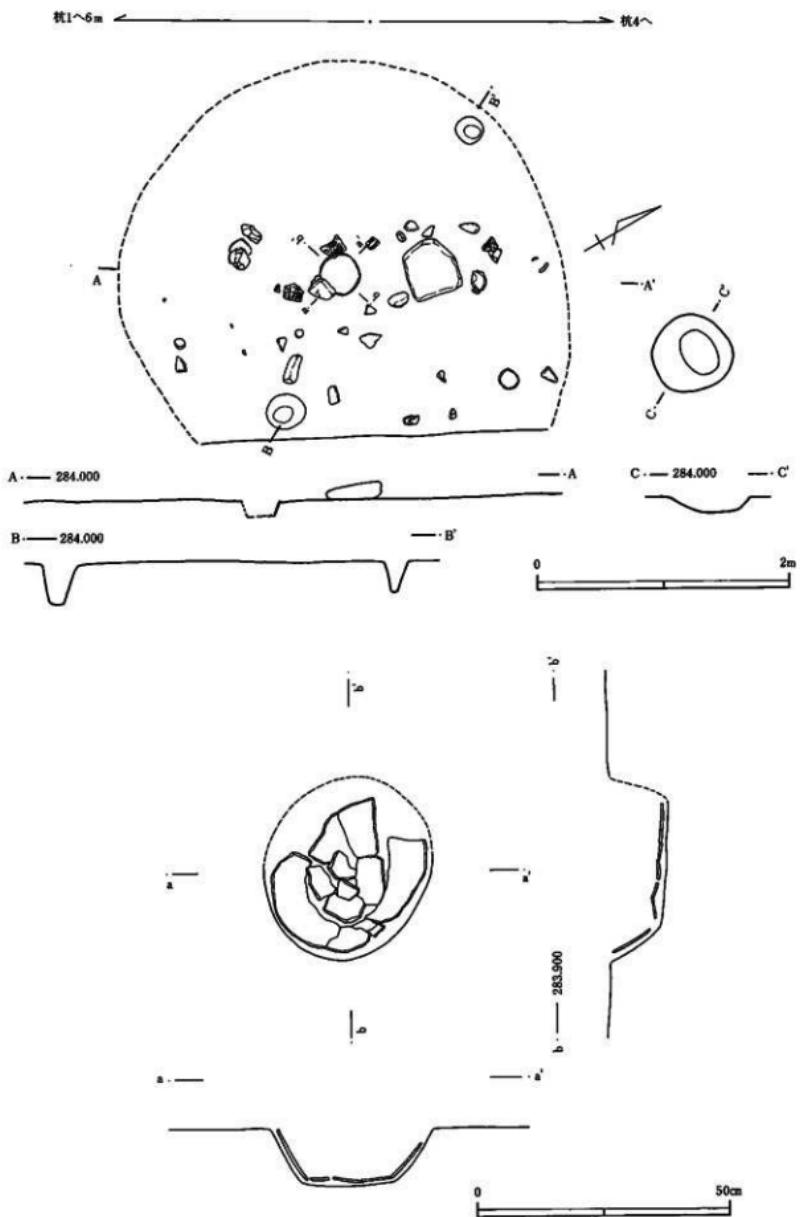
さて、本住居跡を最も特徴付ける存在は炉である。当初は通常の埋甕炉と考えていたが、半分割したところ掘り込み底面に同一個体の破片が敷かれていることが確認された。土器敷き埋甕炉という形式になろうが、このような形態の炉はきわめて特殊であり、類例は知られていないようである。通常は、埋甕炉は輪切りにした胴部をそのまま埋設するか、最初から底部の存在する胴下半部を埋設する形となるのであるが、本例は約10cmの幅（高さ）で輪切り状態にしてなおかつ口縁部や胴部破片を中心部に敷き詰めるというきわめて不合理な行為を行つたことになる。このような不合理な行為の理由付けは現状では不可能であり、今後の類例の増加が望まれる。土器自体は炉体土器するために強く熱を受けており取り上げ時にはぼろぼろと崩れ落ち、また、水洗もできない状況であった。

土坑は住居跡の北東1mに確認されたもので、直径60cmの円形を呈し、深さ10cmと浅い。内部に焼土やカーボンは認められず遺物も出土していない。性格は不明であるが、時期は住居跡と同じと推定する。

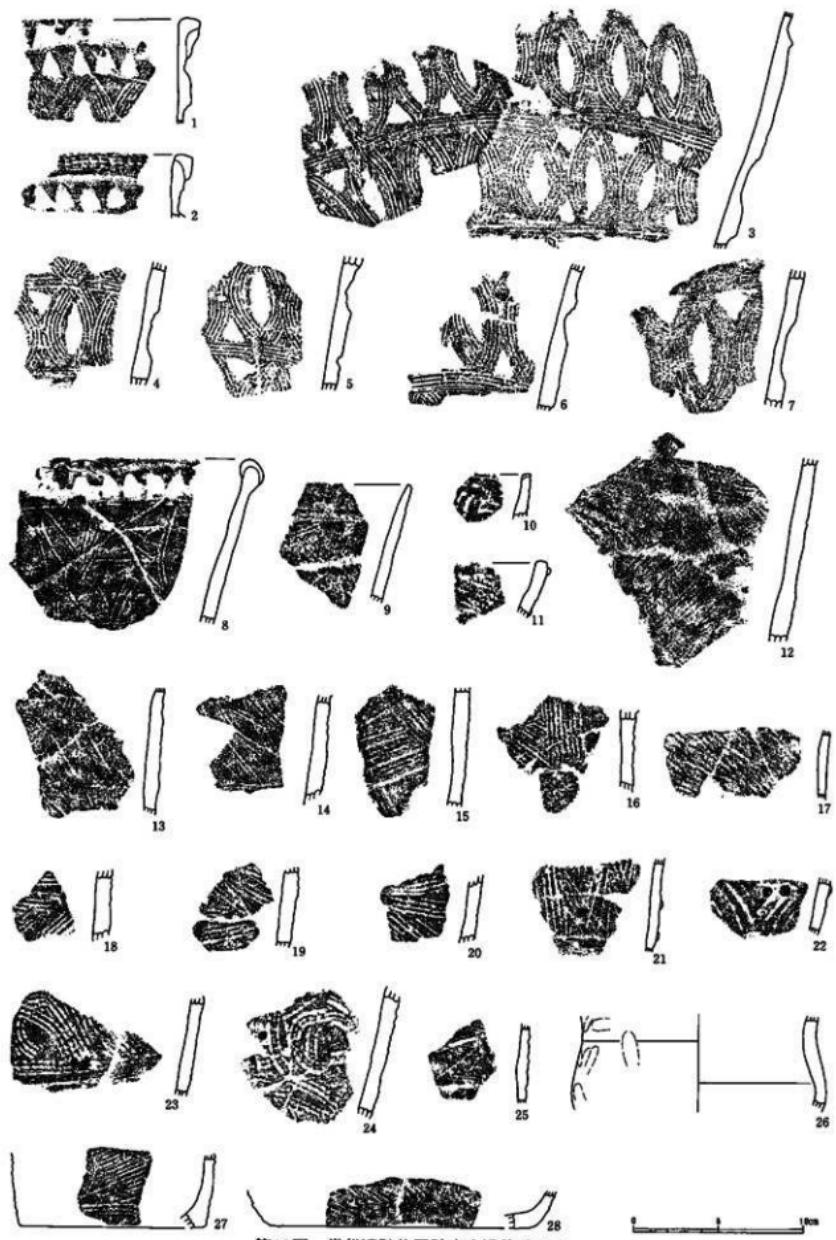
遺物は土器と石器であり、第10~13図に示した。1~7に炉体土器を示した。前述したように炉体土器は胴



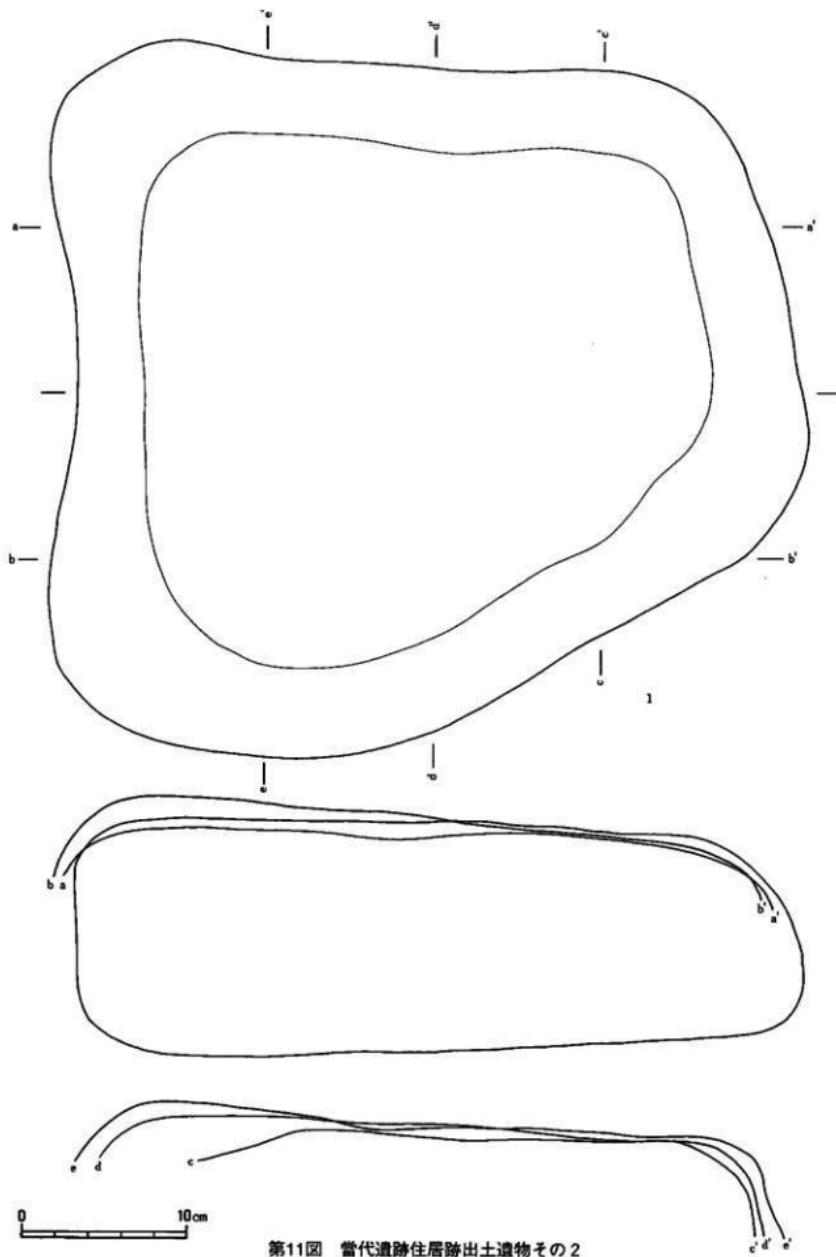
第8図 嘉代遺跡位置図及び全体図



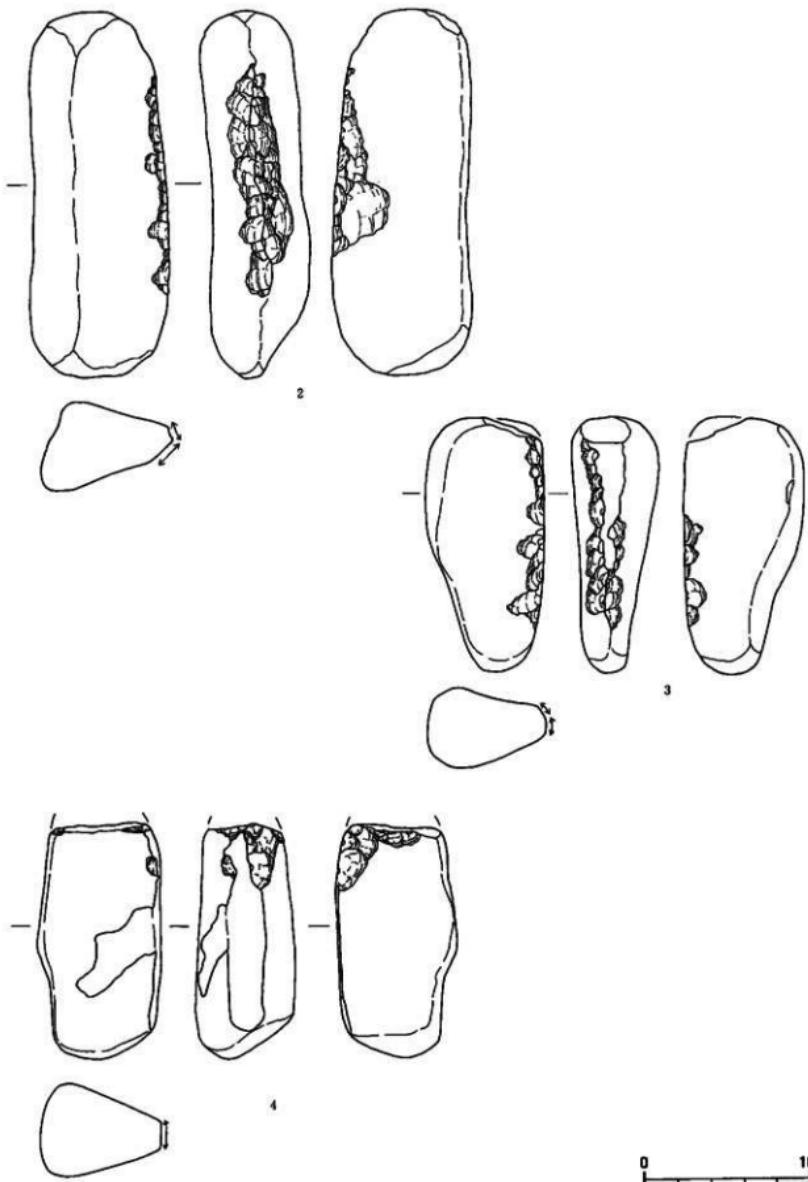
第9図 嘉代遺跡住居跡・炉



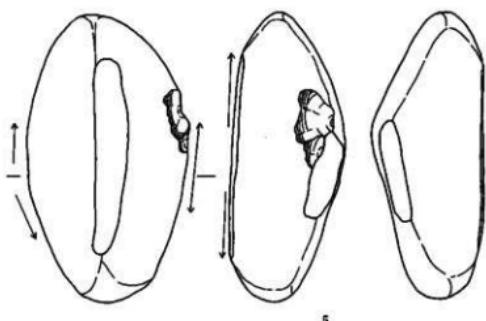
第10図 嘉代遺跡住居跡出土遺物その1



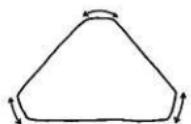
第11図 當代遺跡住居跡出土遺物その2



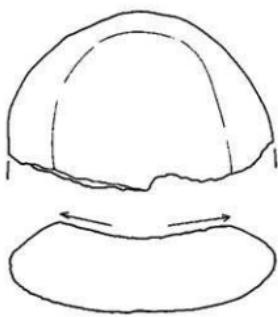
第12図 善代遺跡住居跡出土遺物その3



5



6



0 10cm



8

0 5cm

第13図 當代遺跡住居跡出土遺物その4

部が全周しており、ここに示したものより遙かに多くの破片が存在する。しかし、被熱による傷みがひどく、拓本も不可能な状況であったためやむなく状態のよいもののみを示した。1・2は口唇部破片で、接合する。口唇の状況から一見別個体のようにも見受けられるが同一個体であり、口唇の削り取りによる三角形印刻文が施されない部分には結節状沈線文が施文されることになる。胴部もレンズ状・三角形印刻文の組み合わせを行い、印刻部以外は全面集合条線となる。本県から長野県諏訪地方にかけて見られる典型的な前期終末期の土器である。

8～28は住居内から出土した土器の破片で、炉体土器と時期は一致する。いずれも三角形印刻文や結節条沈線文、集合条線など炉体土器と同じ施文であるが、21・22には豆粒状の添付文が見られる。諸磽c式の名残りであろう。

石器はきわめて特徴的である。遺跡全体から8点が出土した。第13図7に示した打製石斧（ホルンフェルス製：66 g）だけは住居外からの出土である。しかし、遺跡全体でも1点だけの出土であるためここに括した。それ以外はすべて住居内からの出土である。

1は炉の脇に据えられていた台石。ほぼ台形を呈した花崗岩の河床礫を利用したもので、重量47kgを計る。不動の台石にふさわしい重量である。使用面は、図に示したように中期的石皿のラインとは違って、いくつかの微妙な凹凸が存在する。2～4は蔽石である。このうち3・4には一見して擦り面らしき部分が見られるが叩きが繰り返されたことによって形成された平面である。2・4は花崗岩、3は安山岩製である。重量は2：1523 g、3：662 g、4：903 g。1～4に付いては第7章で詳細に述べることとする。5は花崗岩製の稜磨石。断面三角形の礫を用い、それぞれの頂部を擦り面としている。重量1276 g。6は安山岩製の石皿。1／3程度の残存であり、20～25cm程度と推定する。現重量1115 g。8は加工痕ある剥片。黒曜石製で、重量0.82 g。

第5章 大ネギ遺跡の調査

大ネギ遺跡は建物本体にかかる敷地の中心部分に新たに確認された遺跡であるが、周辺トレンチ調査でも遺構は全く確認されず遺物もほとんどない状態であったため、遺物が出土する部分に限定して本調査を行った。調査の結果確認された遺構は平安時代の溝1条だけである。

本遺跡も本調査部分の面積が少ないため、當代遺跡と同様の基準杭設定を行った。杭1～5は以下のように設定した。博物館基準点TB7（X=-40165.046, Y=13711.660）に測量機械を設置して基準点TB6（X=-40185.766, Y=13782.065）を見通し、基準ラインを設定した。TB7から時計回り方向に振って5本の杭を設置した。TB7基準点からそれぞれの杭のデータは以下の通りである。杭1=60° 14' 00"・60.109m、杭2=67° 11' 20"・58.228m、杭3=77° 24' 40"・56.523m、杭4=90° 34' 00"・58.169m、杭5=82° 55' 10"・63.660m。

確認された遺構は溝1条である。遺物は溝の内外から出土しているが、そのほとんどは溝中である。しかし、溝中と溝外の遺物が接合した例もあり、またそれらの時期的な差異もないため一括して以下に報告する。

第14図に示したように、溝は東南東から西南西方向に走るもので、幅約1m、確認面からの深さは10～20cmである。東南東端部は収束が確認されているが、西南西端部ではさらに調査区域外まで続いていることは明らかである。しかし、溝の掘り込みがはっきりしなくなることと遺物が極端に減少すること、さらに近接の131トレンチで縦走する溝が断面で確認できることの3点からこの部分で調査を打ち切ることにしたものである。確認された部分で約43mであり、131トレンチまでの間を考慮すると、溝は最大でも長さ50m程度の単独の存在であったと推定される。

第15図に遺構・遺物の出土状況の詳細を、また、第16～25図に出土遺物を示した。東南東の端部から9mほどの、エレベーションE付近にとくに遺物が集中している。この付近には焼土・カーボンも飛散していた。また、ポイントI付近には10～30cm大の礫の集中が見られた。

遺物は、土器についてはミニチュア（172）の1点を除いて完形品は全くなく、すべてが破損していた。

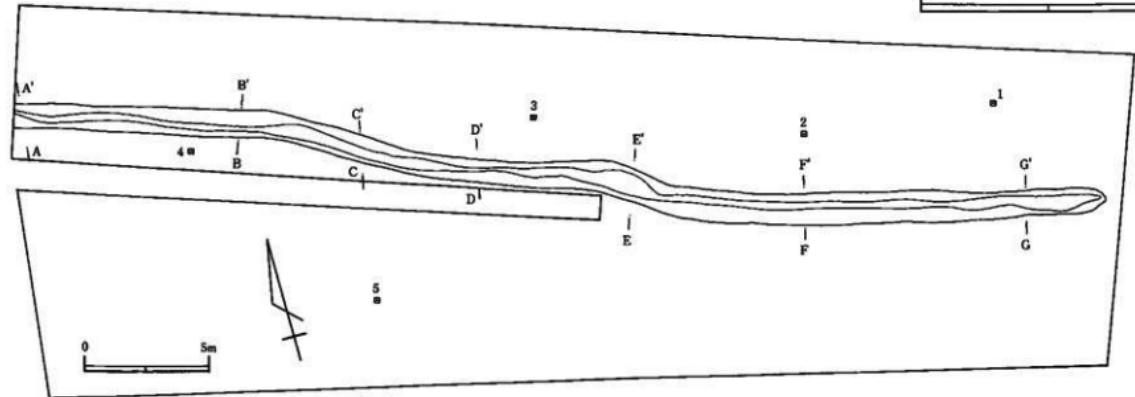
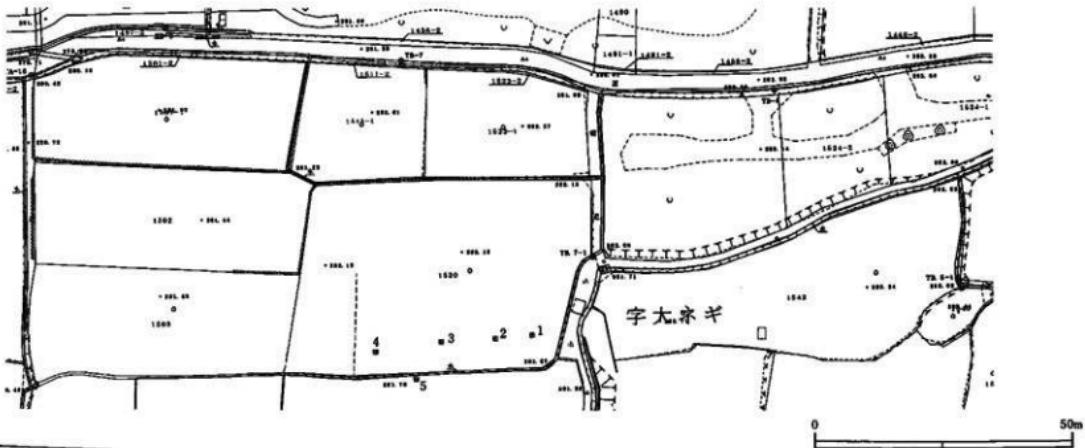
接合例もいくつか見られる。97は、唯一溝の内外の接合例で3点が3mの距離を置いて接合した。2m以上の距離の接合例は4例あり、93は4.6m、92は2.8m、46は2.2m、100は2.1mであった。また、接合例のほとんどは2点であるが、22、97、98、99、103、91が3点、100は4点の接合であった。

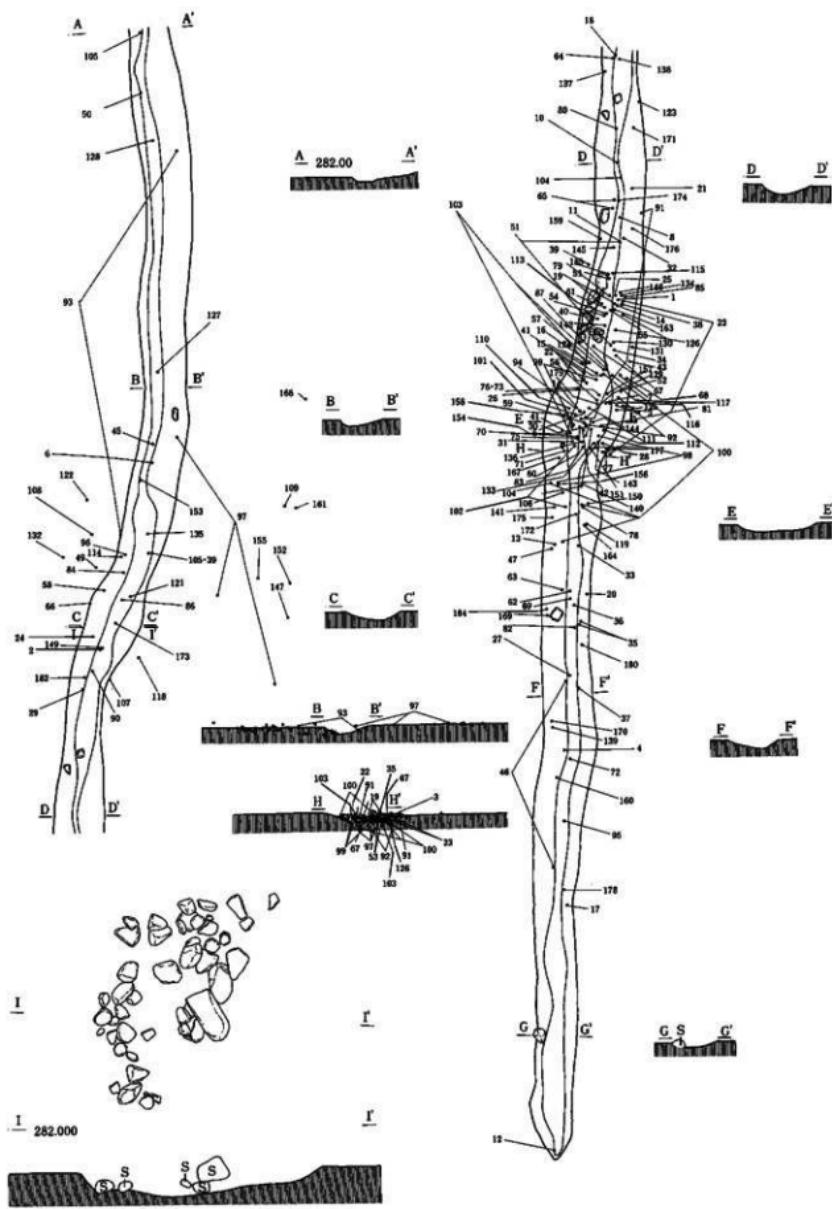
遺物は団化可能であった185点を第16～25図に示す。坏が最も多く、1～21に示した。口唇部が肥厚するものが主体で、内黒も含まれる。高台付坏も非常に多い。22～54に示したが、とくに台部の破片が目立つ。皿は55・56の2点のみである。57は台付き土器の台部、58は高坏の坏部破片である。59～61は壺、同じ壺ながら62～64はロクロ成形である。62・63は同一個体、63・64の底面には糸切り痕が確認される。65～67には羽釜を示したが、出土量は少ない。須恵器は大型の破片が目立ち、壺と壺が確認される。68～122に示した。灰釉陶器も意外に多く出土している。123～169に示したが、坏と皿がほとんどである。170・171は綠釉陶器で、この2点のみである。172・173はミニチュアである。

174～181は土鍤である。このような小規模な、しかも単独で存在した可能性の強い溝での実用的な使用はとても想定できるものではないが、8点のうちの6点は完形である。これらの資料は、県内の他遺跡から出土した土鍤が中央部の膨らんだ算盤玉状を呈した形態が多いのに対し直線的であるという特徴を示す。これについても後述する。重量は完形の174:25g、175:22g、176:20g、177:21g、178:20g、179:22g、半分割の180:11g、181:9gである。182・183は不明土製品としておくが、この時代のこのような製品は動物をかたどったものが知られ、県内では甲府市道々茅木遺跡で土馬が確認されていることからその可能性も考えられるが、土馬とすれば非常に大型である。182:32g、183:20g。184は小型の水晶製石錠で、重量0.45g。绳文時代のものであろう。185は、砂岩製の砥石で4面すべてを使用している。重量133g。

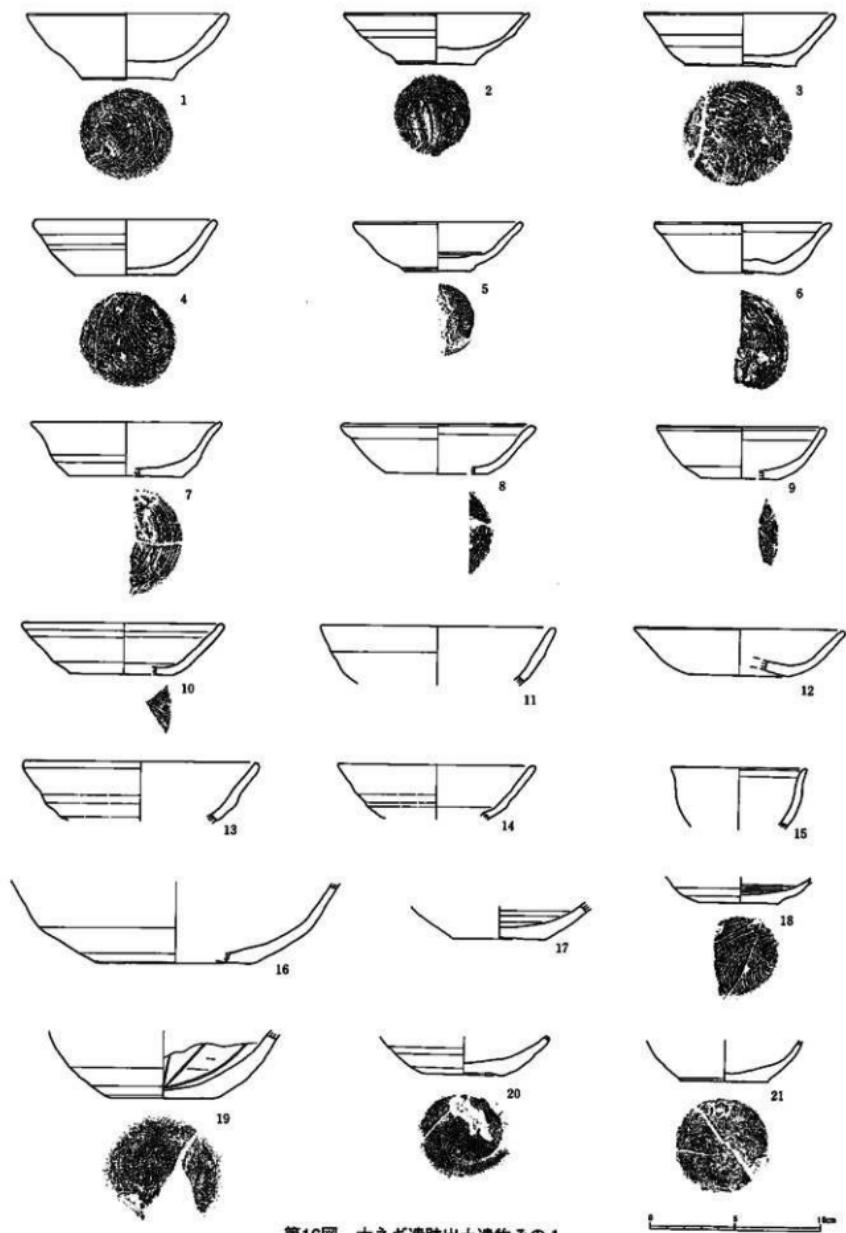
第14図 大ネギ遺跡位置図及び全体図

— 22 —

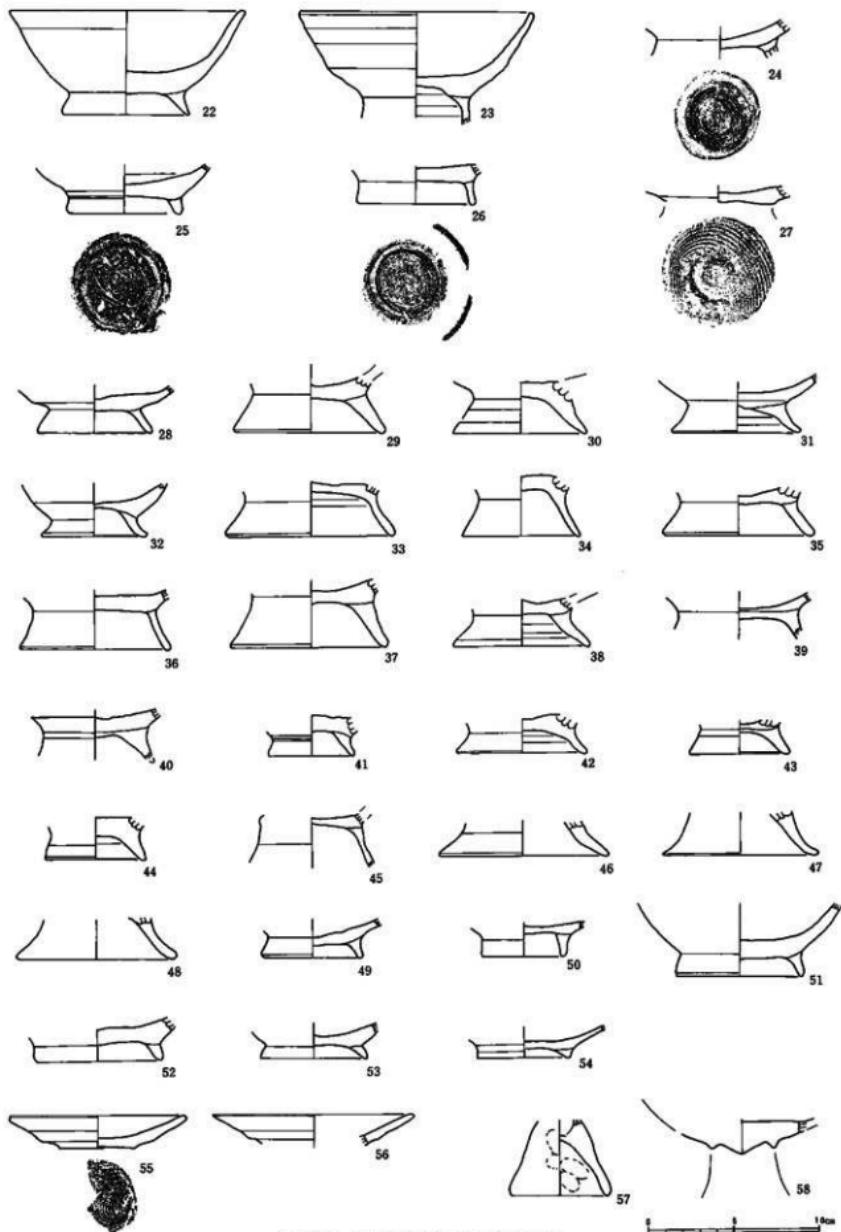




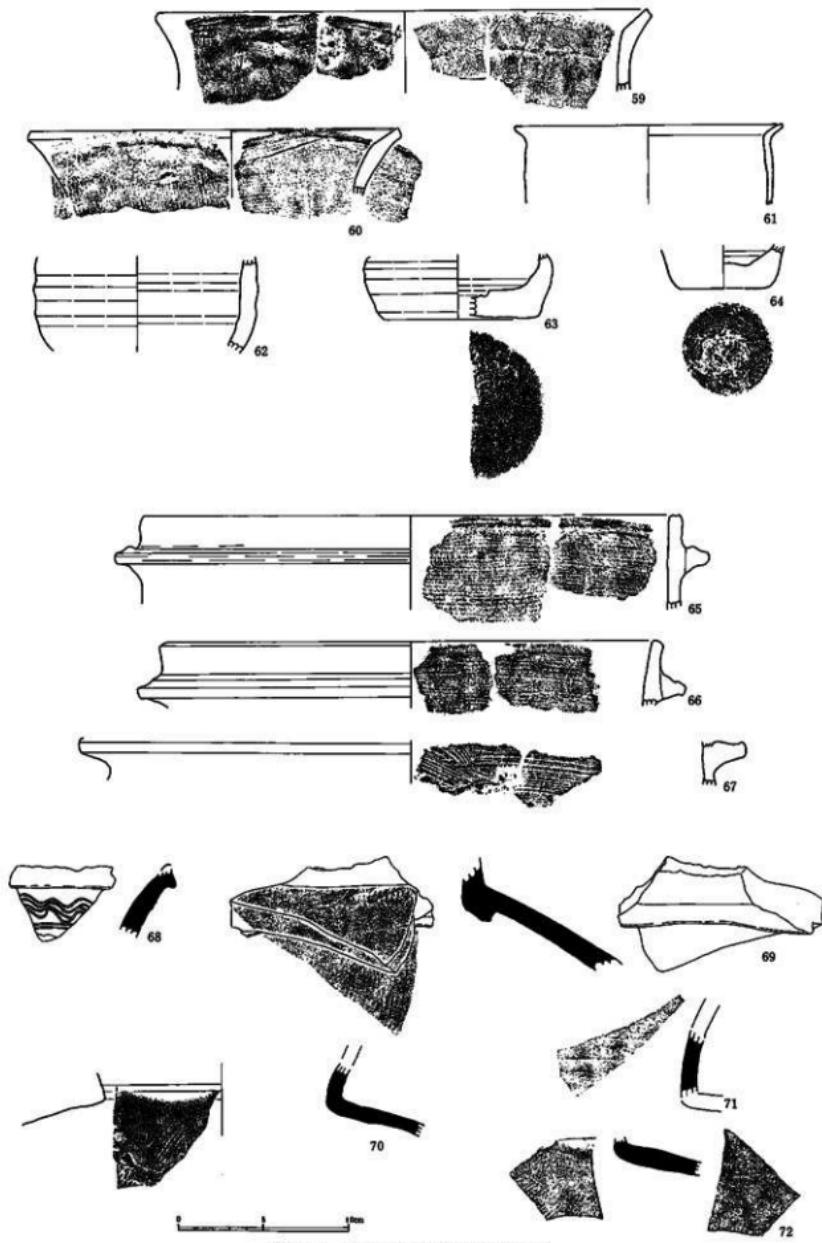
第15図 大ネギ遺跡溝遺物出土状況



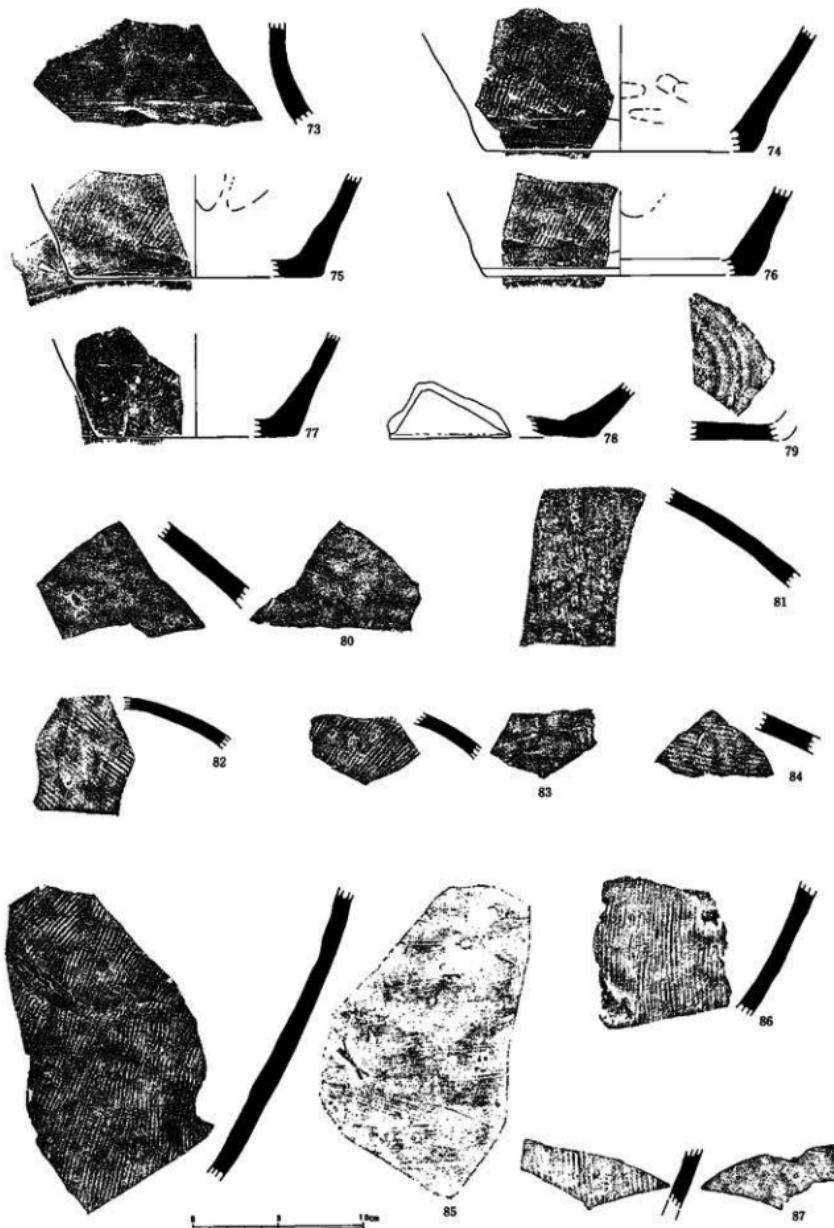
第16図 大ネギ遺跡出土遺物その1



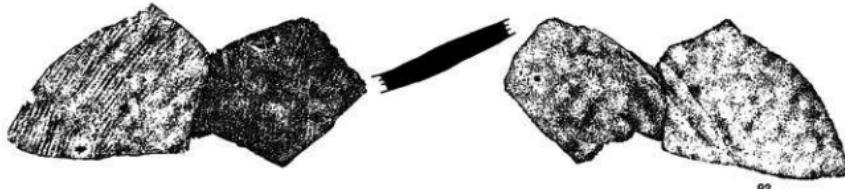
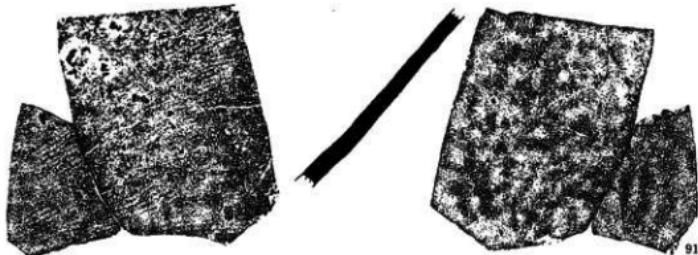
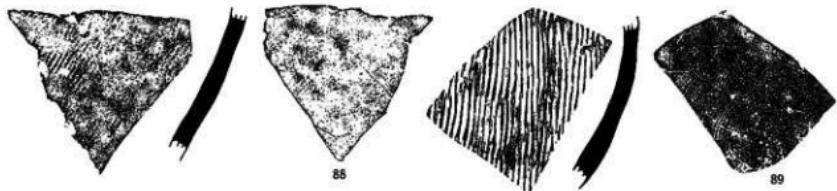
第17図 大ネギ遺跡出土遺物その2



第18図 大ネギ遺跡出土遺物その3

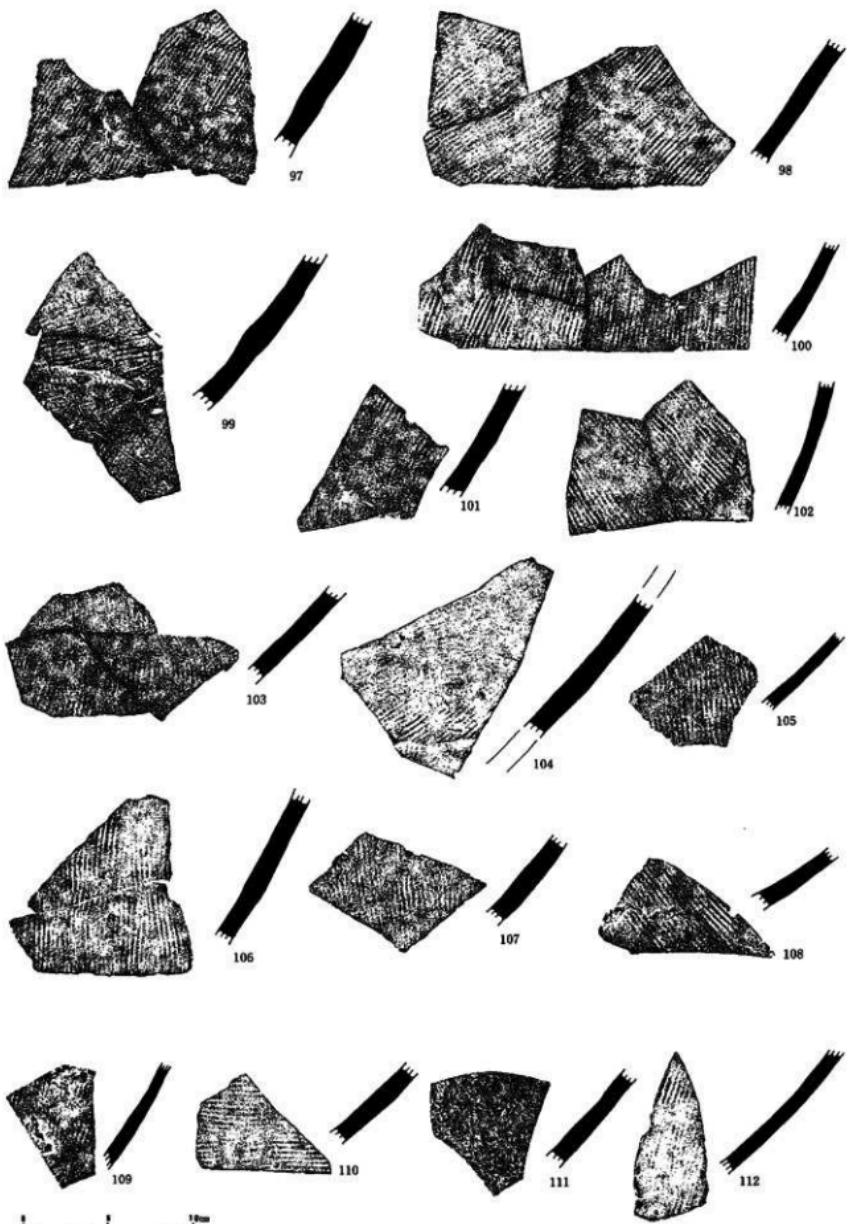


第19図 大ネギ遺跡出土遺物その4

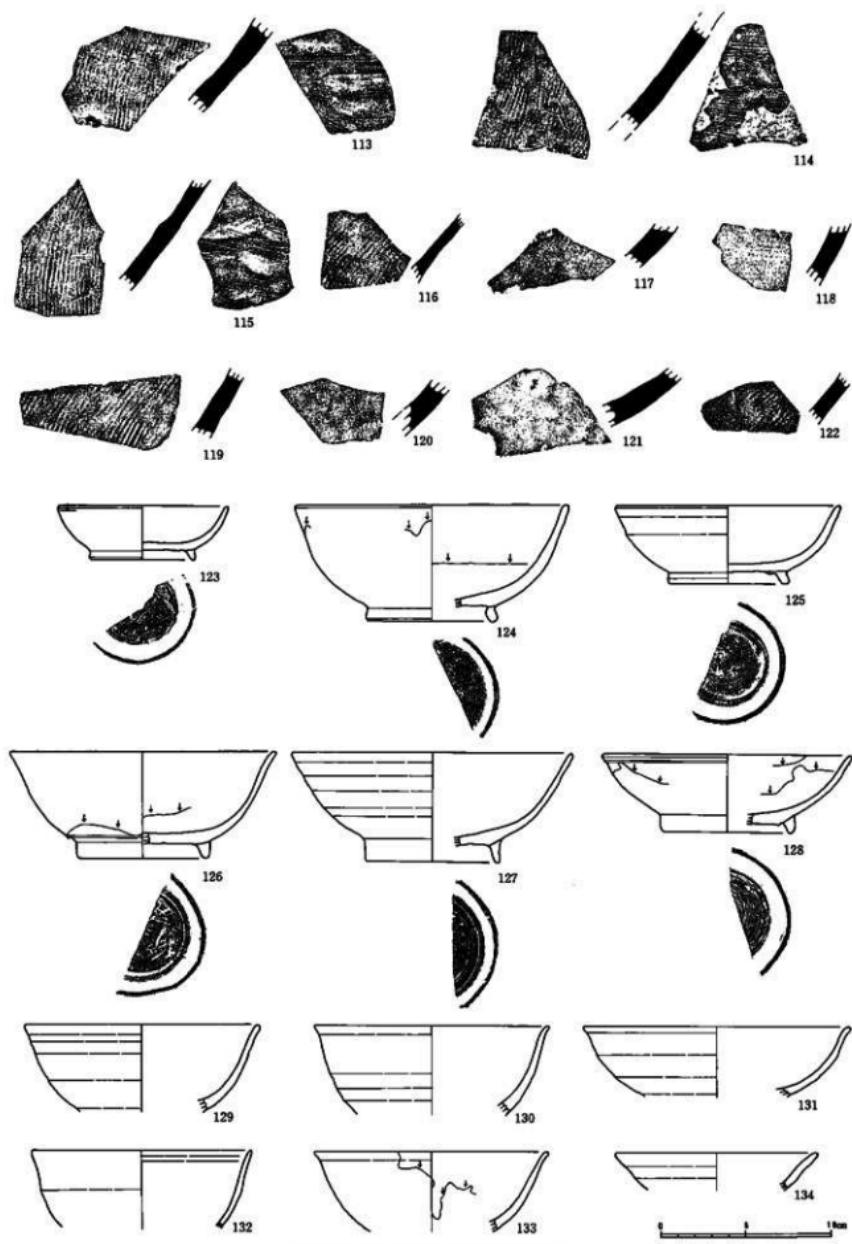


第20図 大ネギ遺跡出土遺物その5

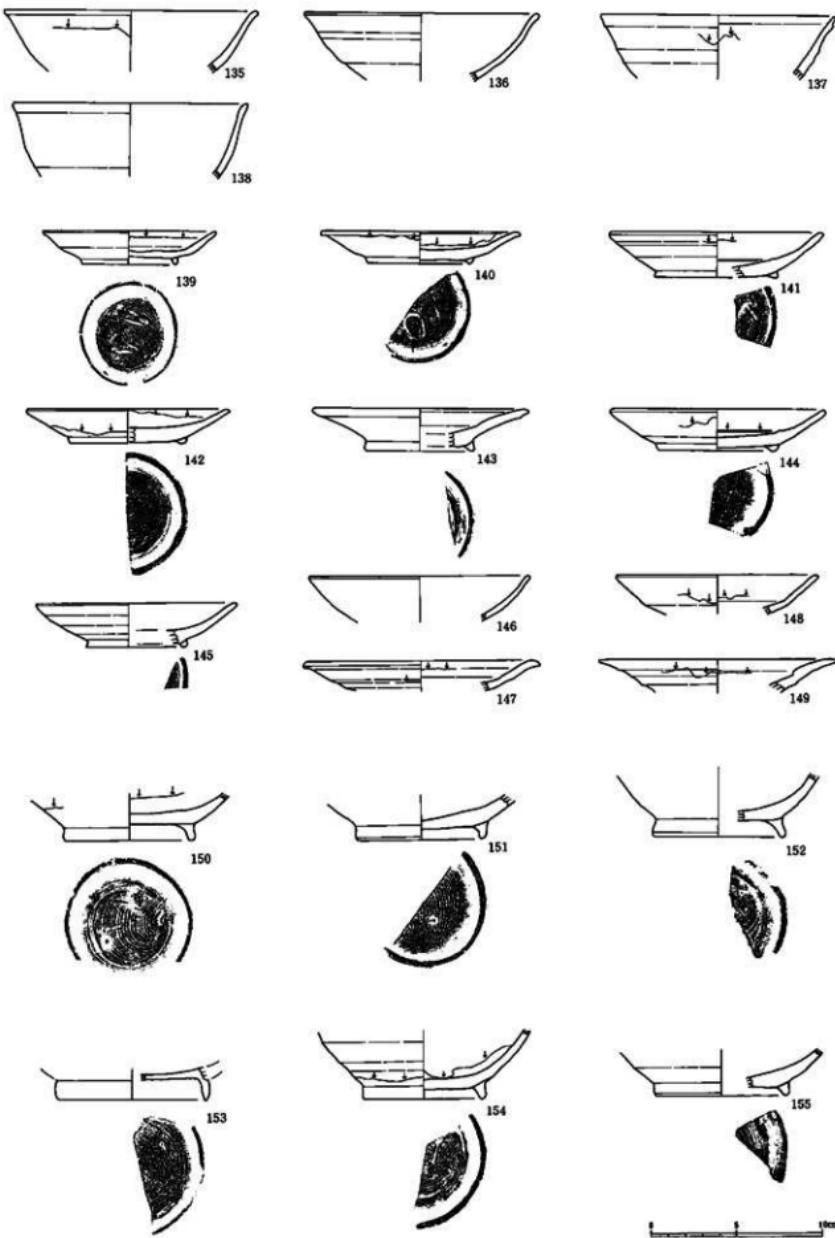
1cm



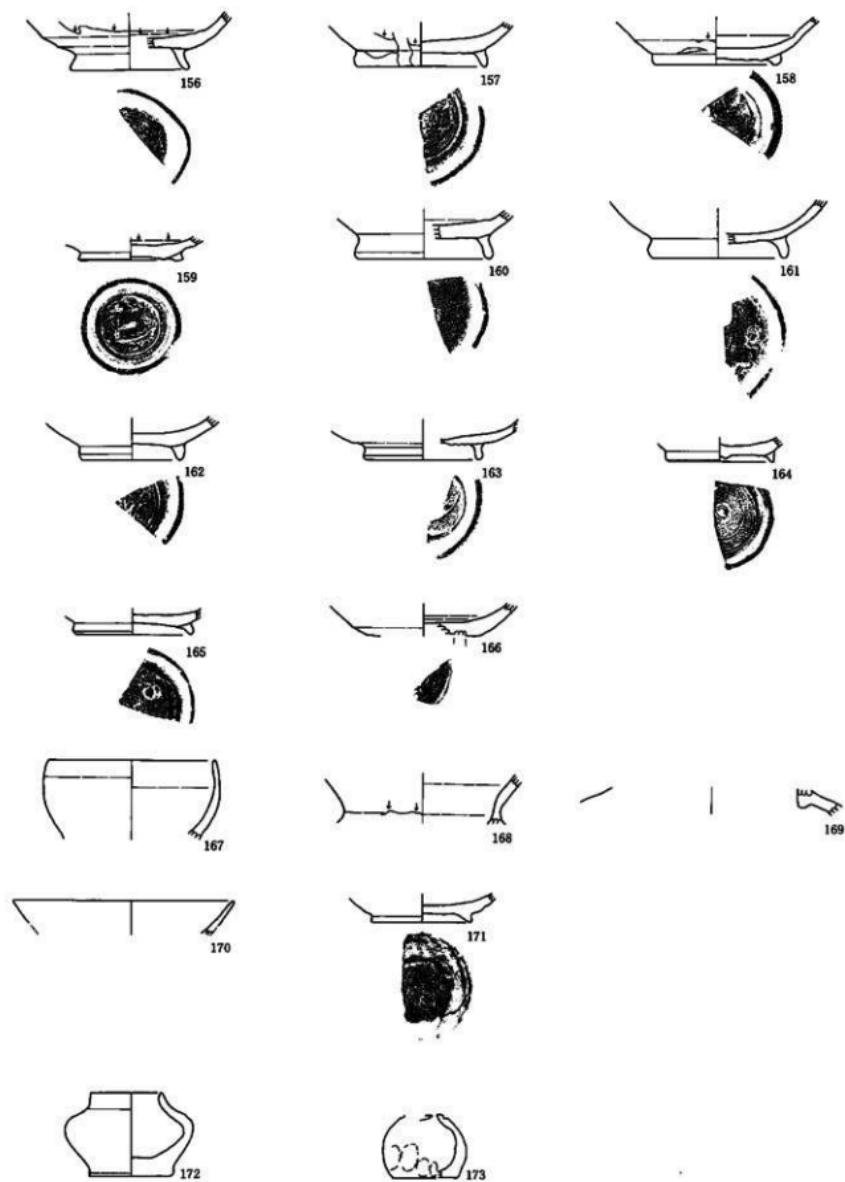
第21図 大ネギ遺跡出土遺物その6



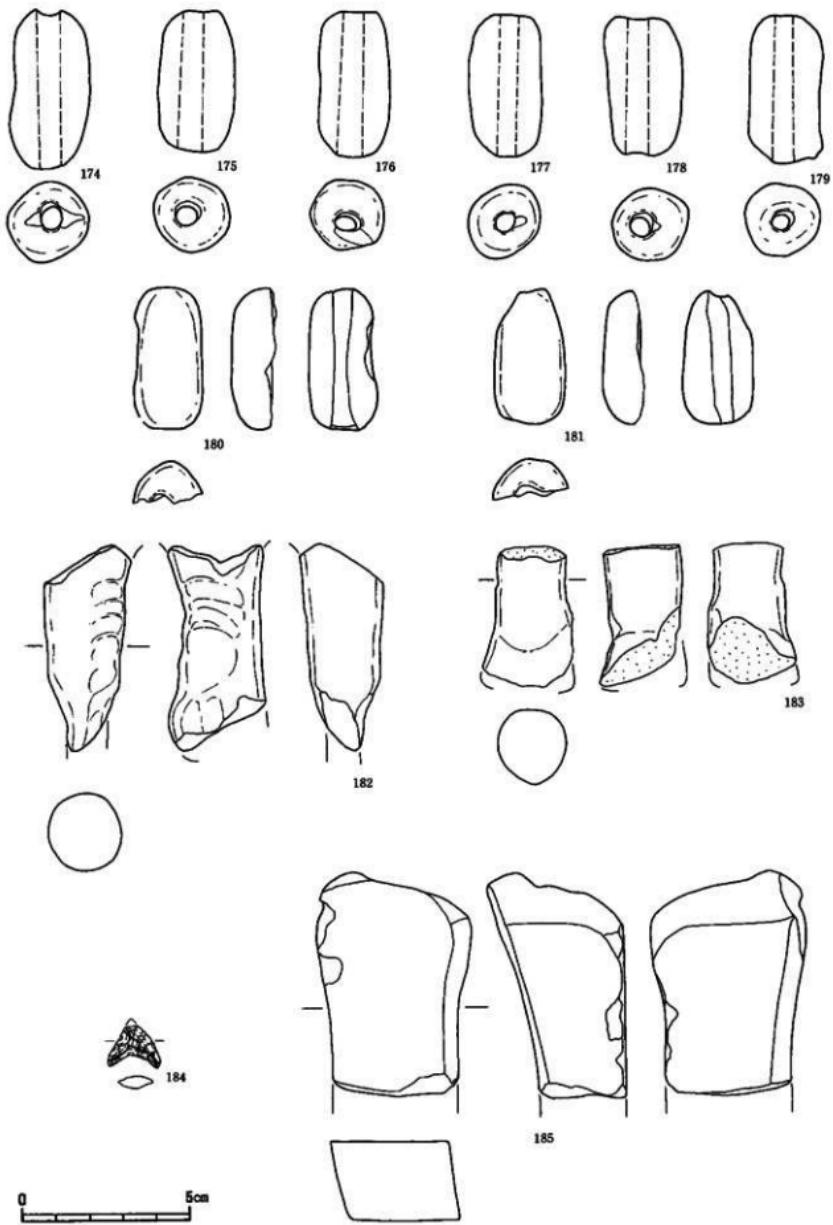
第22図 大ネギ遺跡出土造物その7



第23図 大ネギ遺跡出土遺物 その8



第24図 大ネギ遺跡出土遺物その9



第25図 大ネギ遺跡出土遺物その10

表1 遺物観察表

種類 番号	出土地点	注記番号	種別	器形	法 算			色 調	胎 土	焼成	調 査	備 考
					口	横	高					
6種 6	1 T33	T33	陶文土器	圓筒				黄褐色	やや暗・石英	良		
6種 6	2 T35	T35	陶文土器	圓筒				黑色	黒	良		
6種 6	3 T84	T84	陶文土器	圓筒				白・青褐色	白・金雲母	良		
6種 6	4 T 5	T 5	陶文土器	圓筒				米褐色	米・石英・金雲母	良		
6種 6	5 T 98	T 98	陶文土器	圓筒				米褐色	米・金雲母・白色粒子	良	ハケ	
6種 6	6 T 32	T 32	陶文土器	圓筒				米褐色	米・石英・金雲母	良		
6種 6	7 T 39	T 39	陶文土器	圓筒				米褐色	米・金雲母	良		
6種 6	8 T 71	T 71	陶文土器	圓筒				米褐色	米・金雲母	良		
6種 6	9 T 91	T 91-13	陶生土器	圓筒	(23.0)			米褐色	米	良	口縁削込みハケ	
6種 6	10 T 91	T 91-10	陶生土器	圓筒	(23.0)			米・灰褐色	米・石英	良	口縫壓痕みナデハケ	
6種 6	11 T 34	T 34	陶生土器	圓筒				明褐色	やや暗	良	帶壓痕波文	
6種 6	12 T 91	T 91-53-55	陶生土器	圓筒				灰褐色	米・石英	良	帶壓痕波文	
6種 6	13 T 91	T 91-43	陶生土器	圓筒				灰・灰褐色	米・石英	良		赤鉄
6種 6	14 T 77	T 77	陶生土器	圓筒	(23.0)			明褐色	白色粒子	良	内面削痕板	
6種 6	15 表記	表記	陶生土器	圓筒				明褐色	米・石英	良	ナゲ調査	
6種 6	16 T 128	T 128	陶生土器	圓筒	(11.0)			灰褐色	米・石英	良		
6種 6	17 T 31	T 31	陶生土器	圓筒				浅灰褐色	やや暗・石英	良	ハケ	
6種 6	18 T 32	T 32	陶生土器	圓筒				明褐色	白色粒子	良	ナゲ調査	
6種 6	19 T 91	T 91-42	土器器	S字型	(14.0)			米・灰褐色	米	良		
6種 6	20 T 91	T 91-12	土器器	S字型	(7.0)			米・灰褐色	米	良		
6種 6	21 T 77	T 77	土器器	圓筒				米褐色	米・金雲母	良	ハケ	
6種 6	22 T 77	T 77-10	土器器	圓筒				米褐色	米・金雲母	良	ナゲ調査	
6種 6	23 T 77	T 77	土器器	圓筒				米褐色	米・金雲母	良	ハケ	
6種 6	24 T 91	T 91-4	土器器	圓筒				米褐色	米・金雲母	良	外縁ハケ内面剥	
6種 6	25 T 77	T 77	土器器	圓筒				米褐色	米・金雲母	良	ハケ	
6種 6	26 T 77	T 77-777-3	土器器	圓筒				米褐色	米・石英	良	内外削痕	
6種 6	27 T 35	T 35	土器器	圓筒	(9.0)			明褐色	米・石英	良	外縁剥離	
6種 6	28 T 56	T 56	土器器	圓筒	(14.0)			米褐色	米・石英	良	外縁剥離	
6種 6	29 表記	表記	土器器	圓筒				米褐色	米・石英	良	外縁剥離	
6種 6	30 T 35	T 35 (7.0)	土器器	圓筒	(3.0)			米褐色	米・石英	良	外縁剥離	
6種 6	31 T 2	T 2	土器器	圓筒	(14.0)			米褐色	米・石英	良		
6種 6	32 T 58	T 58 (2個)	土器器	圓筒	(12.0)			米褐色	米・石英	良		
6種 6	33 T 99	T 99	土器器	圓筒	(12.0)			米褐色	米・石英	良		
6種 6	34 T 62	T 62	土器器	圓筒	(12.0)			米褐色	米・石英	良		
6種 6	35 T 107	T 107	土器器	圓筒	(10.0)			米褐色	米・石英	良		
6種 6	36 T 125	T 125	土器器	圓筒	(7.0)			米褐色	米・白色粒子	良		
6種 6	37 T 55	T 55	土器器	圓筒	(5.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
6種 6	38 T 99	T 99	土器器	圓筒	(6.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
6種 6	39 T 77	T 77	土器器	圓筒	(5.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
6種 6	40 T 61	T 61	土器器	圓筒	(5.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	41 T 98	T 98	土器器	圓筒	(5.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	42 T 58	T 58	土器器	圓筒	(5.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	43 T 127	T 127	土器器	圓筒	(20.0)			米褐色	米・石英	良	底部赤鉄	
7種 7	44 T 18	T 18	土器器	圓筒				米褐色	米・石英・金雲母	良		
7種 7	45 T 48	T 48	土器器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良	ナゲ	
7種 7	46 T 58	T 58	土器器	圓筒	(6.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	47 T 102	T 102	土器器	圓筒	(7.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	48 T 128	T 128	土器器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	49 表記	表記	土器器	圓筒	(46.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	50 T 16	T 16	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	51 T 127	T 127	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	52 表記	表記	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	53 T 48	T 48	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	54 T 98	T 98	須恵器	圓筒	(14.0)			米褐色	米・白色粒子	良	内面剥離	
7種 7	55 T 33	T 33	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	56 T 77	T 77-12	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	57 T 128	T 128	須恵器	圓筒	(7.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	58 T 43	T 43	須恵器	圓筒	(7.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	59 T 89	T 89	須恵器	圓筒	(7.0)			米褐色	米・白色粒子	良	底部赤鉄	
7種 7	60 T 13	T 13	須恵器	圓筒	(12.0)			米褐色	米・白色粒子	良	内面剥離	
7種 7	61 T 108	T 108	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	62 T 40	T 40	須恵器	圓筒				米褐色	米・白色粒子	良		
7種 7	出土地点				號大員	號大體	號大厚	量 量 量				
7種 7	63 表記	表記	石器	打製石器	19.7	5	1.4		87.4			
7種 7	64 T 11	T 11	石器		7.9	4.9	4.4		151.1			
7種 7	出土地点				胎 土	燒成	調 査	色 調				
7種 7	注記番号				色 調	胎 土	燒成	胎 土				
7種 7	種別				胎 土	燒成	調 査	胎 土				
7種 7	器形				胎 土	燒成	調 査	胎 土				
7種 7	法 算				胎 土	燒成	調 査	胎 土				
10種 10	1 住	マツミクロ	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	2 住	クワガタメ	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	3 住	クワガタ	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	4 住	マツミクロ	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	5 1 住	マツミクロ	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	6 1 住	マツミクロ	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	7 1 住	マツミクロ	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	8 1 住	225	陶文土器	圓筒				明褐色	石英	良		
10種 10	9 1 住	96	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・雲母	良		
10種 10	10 1 住	210	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・雲母	良		
10種 10	11 1 住	199	陶文土器	圓筒				明褐色	石英	良		
10種 10	12 1 住	201	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・金雲母	良		
10種 10	13 1 住	98	陶文土器	圓筒				米褐色	石英	良		
10種 10	14 1 住	218	陶文土器	圓筒				明褐色	石英	良		
10種 10	15 1 住	201	陶文土器	圓筒				米褐色	石英・金雲母・雲母	良		
10種 10	16 1 住	209	陶文土器	圓筒				明褐色	石英	良		
10種 10	17 1 住	195	陶文土器	圓筒				明褐色	石英	良		
10種 10	18 1 住	207	陶文土器	圓筒				米褐色	石英・雲母	良		
10種 10	19 1 住	207	陶文土器	圓筒				米褐色	石英・雲母	良		
10種 10	20 1 住	207	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・雲母	良		
10種 10	21 1 住	211	陶文土器	圓筒				米褐色	石英・雲母	良		
10種 10	22 1 住	210	陶文土器	圓筒				米褐色	石英・雲母	良		
10種 10	23 1 住	210	陶文土器	圓筒				米褐色	石英・雲母	良		
10種 10	24 1 住	206	陶文土器	圓筒				明褐色	石英・白色粒子	良		

10月 25 1住	208	土端部			暗赤褐色	石英	良	
10月 26 1住	209	土端部			淡黄褐色	金发母	良	外ナガ面切抜・内ナナ
10月 27 1住	217	土端部			紫褐色	白雲・金雲母	良	
10月 28 1住	198	土端部			明褐色	石英	良	
10月 1 深内	375	上端部	环	11.9	3.9	5.3	暗褐色	良
10月 2 2 深内	54	上端部	环	(11.2)	3.0	4.2	浅灰褐色	石英
10月 3 深内	227 - 228	上端部	环	(11.2)	3.1	6.5	外明赤褐色内明褐色	石英
10月 4 深内	351	上端部	环	(11.0)	3.3	6.0	灰褐色	石英
10月 5 深内	240	上端部	环	(10.1)	2.9	4.5	青褐色	金发母
10月 6 5 深内	32	上端部	环	(10.4)	3.0	5.0	带半褐色	石英
10月 7 深内	191	上端部	环	-	3.2	4.5	带半褐色	石英
10月 8 6 深内	120	上端部	环	(12.6)	2.9	6.0	灰褐色	石英
10月 9 深内	なし	上端部	环	(10.0)	3.1	(4.4)	灰-褐色	石英
10月 10 深内	161	上端部	环	(12.0)	3.1	(6.0)	外灰-褐色内橙色	石英
10月 11 深内	129	上端部	环	(14.0)	-	-	白化粒子	良
10月 12 深内	366	上端部	环	(12.4)	2.8	6.0	外褐色内橙色	石英
10月 13 深内	318	上端部	环	(14.0)	-	-	白化粒子	良
10月 14 深内	151	上端部	环	(12.0)	-	-	带色	石英
10月 15 深内	190	上端部	环	(8.0)	-	-	带色	良
10月 16 深内	201	上端部	环	-	(9.0)	-	暗褐色	石英
10月 17 深内	493	上端部		-	5.5	-	外明褐色内暗褐色	石英
10月 18 深内	85	上端部	环	-	4.6	-	灰褐色	石英
10月 19 深内	154 - 157	上端部	环	-	6.0	-	外暗褐色内浅黄色	石英
10月 20 深内	325	上端部	环	-	4.6	-	灰褐色	石英
10月 21 深内	110	上端部	环	-	5.2	-	带色	石英
10月 22 深内	206 - 208	高合付环		(14.0)	6.0	7.8	暗褐色	良
10月 23 深内	176 - 141 - 278	高合付环		(14.0)	-	-	带色	石英
10月 24 深内	52	上端部	高合付环	-	-	-	灰-黄褐色	良
10月 25 深内	147	上端部	高合付环	-	(6.8)	-	带色	石英・金雲母
10月 26 深内	218	上端部	高合付环	-	(7.0)	-	带色	良
10月 27 深内	340	上端部	高合付环	-	-	-	带色	内ナナ
10月 28 深内	274	上端部	高合付环	-	-	-	外灰-褐色内灰-蓝色	石英
10月 29 深内	78	上端部	高合付环	-	6.0	-	带色	良
10月 30 深内	261	上端部	高合付环	-	(7.6)	-	外暗褐色内褐色	石英
10月 31 深内	287	上端部	高合付环	-	(7.6)	-	明褐色	良
10月 32 深内	126	土端部	高合付环	-	(6.4)	-	带色颗粒	良
10月 33 深内	333	土端部	高合付环	-	(12.0)	-	带色	ナナ・ヘラナ・底部 ホリタ
10月 34 深内	180	土端部	高合付环	-	4.0	-	带色	良
10月 35 深内	327 - 343	土端部	高合付环	-	(6.0)	-	带色	良
10月 36 深内	253	土端部	高合付环	-	(6.0)	-	带色	良
10月 37 深内	277	土端部	高合付环	-	9.4	-	带色	良
10月 38 深内	166	土端部	高合付环	-	(8.0)	-	带色	石英・石英
10月 39 深外	43外 - 45外	上端部	高合付环	-	-	-	带色	ナナ
10月 40 深内	166	上端部	高合付环	-	-	-	带色	石英
10月 41 深内	211	上端部	高合付环	-	5.1	-	外暗褐色内橙色	良
10月 42 深内	262	上端部	高合付环	-	7.6	-	带色	ナナ
10月 43 深内	189	上端部	高合付环	-	6.0	-	带色	良
10月 44 深内	256	上端部	高合付环	-	(5.0)	-	带色	ナナ
10月 45 深内	30	上端部	高合付环	-	-	-	带色	良
10月 46 深内	342 - 356	上端部	高合付环	-	-	-	带色	良
10月 47 深内	334	上端部	高合付环	-	(5.2)	-	带色	良
10月 48 深内	なし	上端部	高合付环	-	(6.0)	-	带色	良
10月 49 深内	46	上端部	高合付环	-	6.0	-	带色	ナナ
10月 50 深内	129	上端部	高合付环	-	-	-	带色	ナナ
10月 51 深内	139	上端部	高合付环	-	(7.6)	-	带色	ナナ
10月 52 深内	234	上端部	高合付环	-	7.8	-	带色	ナナ
10月 53 深内	129 - 179	上端部	高合付环	-	6.4	-	外暗褐色内深褐色	良
10月 54 深内	165	上端部	高合付环	-	5.4	-	带色	ナナ
10月 55 深内	380	上端部	黑	(16.6)	1.9	4.4	带色	金雲母
10月 56 深内	230	土端部	黑	(12.0)	-	-	外褐色内浅褐色	石英
10月 57 深内	194	土端部	台面脚	-	(6.0)	-	带色	石英・碧玉
10月 58 深内	57	土端部	黑环	-	-	-	带色粒子	良
10月 59 深内	381	土端部	黑	-	-	-	带色	ナナ・ナハナ
10月 60 深内	259	土端部	黑	-	(22.0)	-	带色	ナナ・ナハナ・内ハナ
10月 61 深内	158	土端部	黑	-	(16.0)	-	带色	ナナ
10月 62 深内	222	土端部	黑	-	-	-	带色	ナナ
10月 63 深内	321	土端部	黑	-	(5.0)	-	带色	ナナ
10月 64 深内	86	土端部	黑	-	5.0	-	带色	内ヘナナ・底部 ホリタ
10月 65 深内	111 - 112	土端部	羽状	-	-	-	带色	石英・金雲母
10月 66 深内	371 - なし (2個)	土端部	羽状	(30.0)	-	-	带色	石英
10月 67 深内	183 - 185	土端部	羽状	(39.6)	-	-	带色	石英・金雲母
10月 68 深内	193	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 69 深内	336	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 70 深内	399	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 71 深内	291	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 72 深内	406	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 73 深内	209	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 74 深内	381	同前部	羽状	-	(16.0)	-	带色	石英
10月 75 深内	285	同前部	羽状	-	(15.0)	-	带色	石英
10月 76 深内	593	同前部	羽状	-	(16.0)	-	带色	石英
10月 77 深内	277	同前部	羽状	-	(12.0)	-	带色	石英
10月 78 深内	306	同前部	羽状	-	-	-	带色灰褐色	石英
10月 79 深内	144	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 80 深内	97	同前部	羽状	-	-	-	带灰褐色	石英
10月 81 深内	268	同前部	羽状	-	-	-	带灰褐色	石英
10月 82 深内	405	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 83 深内	398	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 84 深内	73	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 85 深内	148	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 86 深内	61	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 87 深内	198	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 88 深内	305	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 89 深内	1	同前部	羽状	-	-	-	带色	石英
10月 90 深内	71	同前部	羽状	-	-	-	带灰褐色	石英
10月 91 深内	114 - 272 - 387	同前部	羽状	-	-	-	带灰褐色	石英

20 国	92 海内	383 - 226	須更勝	黒	明神丸色	黒	良	
20 国	93 海内	9 - 49	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
20 国	94 海内	242	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
20 国	95 海内	348	須更勝	黒	黒	黒	良	
20 国	96 海内	44	須更勝	黒	黒	黒	良	
21 国	97 海内・海外	21 例・29 - 13 月	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	98 海内	402 - 270 - 273	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	99 海内	214 - 354 - 255	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	100 海内	322 - 305 - 307 - 317	須更勝	黒	赤色	黒	良	
21 国	101 海内	246	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	102 海内	280 - 309	須更勝	黒	赤色	黒・白鉛子	良	
21 国	103 海内	203 - 358 - 196	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	104 海内	106	須更勝	黒	赤色	黒	良	
21 国	105 海外	45 例	須更勝	黒	明神丸色	黒	良	
21 国	106 海内	403	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	107 海外	76	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	108 海外	35 例	須更勝	黒	黒	黒	良	
21 国	109 海内	3 例	須更勝	黒	黒	黒	良	
21 国	110 海内	245	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
21 国	111 海内	237	須更勝	黒	赤色	黒	良	
21 国	112 海内	269	須更勝	黒	黒	黒	良	
22 国	113 海内	163	須更勝	黒	黒	黒・石英	良	
22 国	114 海内	143	須更勝	黒	黒	黒・石英	良	
22 国	115 海内	137	須更勝	黒	黒	黒・石英	良	
22 国	116 海内	341	須更勝	黒	黒	黒	良	
22 国	117 海内	199	須更勝	黒	黒	黒・石英	良	
22 国	118 海外	29 例	須更勝	黒	赤色	黒	良	
22 国	119 海内	312	須更勝	黒	赤色	黒	良	
22 国	120 海内	246	須更勝	黒	赤色	黒・石英	良	
22 国	121 海内	48	須更勝	黒	黒	黒	良	
22 国	122 海外	32 例	須更勝	黒	赤色	黒	良	
22 国	123 海内	91	灰地物母口	环	(10.2) 3.2 (6.2)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
22 国	124 海内	203	灰地物母口	环	(16.4) 6.9 (8.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 沼田山1号
22 国	125 海内	229	灰地物母口	环	(13.2) 4.65 (6.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 沼田山1号
22 国	126 海内	156 - 167	灰地物母口	环	(15.6) (7.6)	灰白色	黒	底部丸切り板 沼田山1号
22 国	127 海内	24	灰地物母口	环	(16.8) 6.45 (8.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 沼田山1号
22 国	128 海内	11	灰地物母口	环	(14.0) 4.7 (7.4)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
22 国	129 海内	238	灰地物母口	环	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
22 国	130 海内	176	灰地物母口	环	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
22 国	131 海内	175	灰地物母口	环	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
22 国	132 海外	37 例	灰地物母口	环	(13.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
22 国	133 海内	263	灰地物母口	环	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
22 国	134 海内	145	灰地物母口	环	(12.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 大里2号
23 国	135 海外	41 例	灰地物母口	环	(15.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	136 海内	262	灰地物母口	环	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	137 海内	90	灰地物母口	环	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	138 海内	83	灰地物母口	环	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	139 海内	349	灰地物母口	环	(10.2) 2.0 (5.6)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	140 海内	264	灰地物母口	环	(11.8) 1.9 (6.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	141 海内	314	灰地物母口	环	(12.0) 2.7 (7.2)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	142 海内	176	灰地物母口	环	(12.0) 2.0 (6.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	143 海内	285	灰地物母口	环	(12.0) 2.5 (6.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	144 海内	234	灰地物母口	环	(12.0) 2.5 (6.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	145 海内	134	灰地物母口	环	(12.0) 2.5 (6.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	146 海内	143	灰地物母口	环	(13.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	147 海外	16 例	灰地物母口	三	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	148 海内	なし	灰地物母口	三	(12.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	149 海内	56	灰地物母口	五	(14.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	150 海内	323	灰地物母口	华	(7.6)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	151 海内	280	灰地物母口	环	(7.6)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	152 海外	17 例	灰地物母口	环	(7.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	153 海内	35	灰地物母口	环	(9.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	154 海内	57	灰地物母口	环	(7.2)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	155 海外	12 例	灰地物母口	环	(4.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	156 海内	303	灰地物母口	环	(4.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	157 海内	217	灰地物母口	环	(4.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	158 海内	245	灰地物母口	环	(7.6)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
23 国	159 海内	127	灰地物母口	环	(4.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 丸石2号
24 国	160 海内	355	灰地物母口	环	(9.2)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	161 海外	1 例	灰地物母口	环	(8.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	162 海内	217	灰地物母口	环	(6.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	163 海内	130	灰地物母口	环	(7.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	164 海内	313	灰地物母口	环	(6.4)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	165 海外	223	灰地物母口	环	(7.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	166 海外	14 例	灰地物母口	五	(4.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	167 海内	294	灰地物母口	环	(10.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	168 海内	4 例	灰地物母口	五	(4.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	169 海内	324	灰地物母口	五	(4.8)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	170 海内	254	灰地物母口	环	(6.0)	灰白色	黒	底部丸切り板 關西27号
24 国	171 海内	95	結物母口	环	6.0	緑	黒	近江鑿、O-S3平行 底部丸切り板
24 国	172 海内	310	土彌母口	ミニチュア	(4.3) 5.0	明神丸色	石面	ナガ
24 国	173 海内	63	土彌母口	ミニチュア	(4.0)	浅黄褐色	石面	ナガ別用底板
25 国	174 海内	113	土彌母口	土彌	4.7	2.4 7.0mm×6.0mm	25.31g	
25 国	175 海内	311	土彌母口	土彌	4.2	2.5 7.0mm×6.0mm	22.44g	
25 国	176 海内	119	土彌母口	土彌	4.3	2.2 7.0mm×6.0mm	20.03g	
25 国	177 海内	275	土彌母口	土彌	4.2	2.2 7.0mm×5.5mm	21.21g	
25 国	178 海内	353	土彌母口	土彌	4.2	2.3 7.0mm×6.0mm	19.80g	
25 国	179 海内	251	土彌母口	土彌	4.4	2.2 7.0mm×6.0mm	21.70g	
25 国	180 海内	347	土彌母口	土彌	4.2	2.2 7.0mm×6.0mm	18.84g	
25 国	181 海内	6 例	土彌母口	土彌	4.0	2.3 8.5mm	8.58g	
25 国	182 海内	68	土彌母口	不明				
25 国	183 海内	なし	土彌母口	不明				
25 国	184 海内	345	石彌	石彌				水鼎
25 国	185 海内	140	石彌	石彌				水鼎

第6章 當代遺跡・大ネギ遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山梨県東八代郡御坂町に所在する當代遺跡・大ネギ遺跡では、発掘調査の結果、縄文時代前中期（十三世紀）に比定される埋壺炉の伴う住居跡が1基検出されている。

本報告では、住居跡に伴う埋壺炉内土壤について微細遺物分析を行い、食物残渣や燃料材に由来すると考えられる微細遺物を抽出し、当時の生業等に関する資料を作成する。

1. 試料

試料は、住居址に伴う埋壺炉から採取した土壤試料2点である。両試料とも乾燥し、硬く締まった状態である。試料の重量は、試料Aが3200g、試料Bが5010gである。

これら試料について、各試料から1000ccを抽出し、微細遺物分析を実施する。

2. 方法

各試料から抽出した1000ccの土壤を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。抽出した植物遺体は、48時間40℃で乾燥後、形態的特徴から種類を同定し、乾燥重量を求める。また、抽出された炭化材については、各試料から無作為に10片を選択し、木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡で観察し、種類を同定する。分析後の炭化材を除いた植物遺体等は、乾燥剤とともに種類毎にビンに入れて保存する。

3. 結果

結果を表に示す。両試料とも篩別後の残渣からは、炭化材や不明炭化物、菌核、土器片、高師小僧などが認められた。一方、種実遺体や骨片などの動物遺存体は全く検出されない。

埋壺炉内土壤から抽出された炭化材は、最も大きい個体で2mm角程度であり、大部分は1mm角に満たない細片である。炭化材は、全て遺管が認められることから広葉樹である。このうち、試料Aの土壤から抽出された炭化材4片と試料Bから抽出された1片は、晩材部に道管の火炎状配列が認められることから、ブナ科クリ属

表 微細遺物分析結果

試料名	分析量(cc)	種類名	個数	乾燥重量(g)	街種同定点数	樹種()内は点数
A	1000	炭化材	破片	0.18	10	クリまたはコナラ節(4)
		不明炭化物	破片	+		広葉樹(6)
		高師小僧(褐鉄鉢)	破片	1.41		
		土器	破片1	6.98		
B	1000	炭化材	破片	0.11	10	クリまたはコナラ節(1)
		不明炭化物	破片	+		広葉樹(9)
		菌核	1	+		
		高師小僧(褐鉄鉢)	破片	1.36		
		土器	破片1	3.75		

注) +は0.01g以下を示す

のクリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) またはコナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) に同定される。ただし、いずれも細片のため、どちらの樹種かは不明である。この他の炭化材片は、遺存状況が不良で同定に必要な組織観察が行えなかったため、種類の特定に至らない。不明炭化物とした抽出物は、木材組織が認められず、部位・種類の特定の不可能な炭化物である。菌類の菌核は、おそらく樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる。高師小僧（褐鉄鉢の一種）は、表面に土の様な凸凹があり、中央に孔が縦に貫通する管状構造を示し、赤褐色で長さ10mm、径5mm程度である。この高師小僧は、植物の根の周りに形成されるため、かつて根があった痕跡である。その他に、土器の破片が確認される。

4. 考 察

住居址内の埋壺炉から採取した土壤の微細遺物分析の結果、期待された食物残滓に由来すると考えられる種実遺体や動物遺存体は検出されなかったが、微細な炭化材片や炭化物片が認められた。これらは埋壺炉内の土壤から抽出されたことから、炉内で燃料材として使用された植物遺体の可能性がある。炭化材片中に認められたクリあるいはコナラ節は、いずれも山梨県内の遺跡ではよく認められる種類である。縄文時代の資料については、分析調査例は少ないもののクリなどが認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993；植田、1997）。なお、クリやコナラ節は、二次林の構成種であること等を考慮すると、遺跡周辺にこれら種類が生育しており、入手の容易な木材を燃料材として利用したことが窺われる。

引用文献

- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定。「山梨県 中巨摩郡白州町 上北田遺跡 県営闇場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.1-5, 白州町教育委員会・駿北土地改良事務所。
植田弥生（1997）社口遺跡から出土した炭化材の樹種。「社口遺跡第3次調査報告書」, p.194-198, 山梨県北巨摩郡高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団。

第7章 若干の考察

今回の試振調査では、当初の予想とは裏腹にごく小規模の遺跡が2ヶ所で確認されたに過ぎなかった。しかし、それぞれの遺跡では、これまた予想外の貴重な遺物にめぐり合うこととなった。出土した資料のうち當代遺跡住居跡の石器群と大ネギ遺跡の土錐について触れ、まとめてかえたい。

最初に、當代遺跡の石器群について触れておく。比較資料として御坂町桂野遺跡の石器を示す。第26・27図に両遺跡の石器を示したが、1～6が當代遺跡、7～14が桂野遺跡資料である。

まず、それぞれの石器の特徴を示しておく。

1は台石で、前述したように炉の脇に据え付けられた重量47kgの花崗岩河床礫である。これだけの重量であることから、まさに炉の脇に一度据えられたまま不動であったのであろう。45×40cmと、作業台として都合のよい大きさである。

2は、断面三角形の河床礫を手に持って叩いた敲石である。叩きによって稜線の両側に剥離が及んでいる。

3は、これも1と同様の持ち方で同じように叩いた敲石である。1と違うところは、繰り返しの使用により1～1.5cmの幅で頂部に潰れが生じていることである。

4は、これも1と同様の持ち方で同じように叩いた敲石である。3よりさらに使用されたため頂部の潰れは、よりいっそう大きく、平均2cmになっている。この部分だけを見れば後磨石と変わりないくらいであるが、擦りによって生じた平面と決定的に違うのは、その境部分で、擦りでは棱が一直線に滑らかであるのに対し、これらの資料はぎざぎざが残っているため、実際に触れてみるとはっきりする。

5は、中期的石皿である。このような凹面の石皿は、すでに早期段階から存在することが知られる。本資料は前期終末期であり、近接の花鳥山遺跡から一段階古い時期で同形態のものが確認されていることからも、この時期にこの形態が存在することには問題ない。

6は、前期後半を特徴付ける棱磨石で諸磯式期に多い。本資料は断面三角形の3本の棱すべてを使用している。

7は諸磯b式期の住居跡出土の台石で、炉から60cmの距離に置かれていた。割れた礫を用いたもので重量18kgである。中央部を中心にはば全面が使用面となっている。

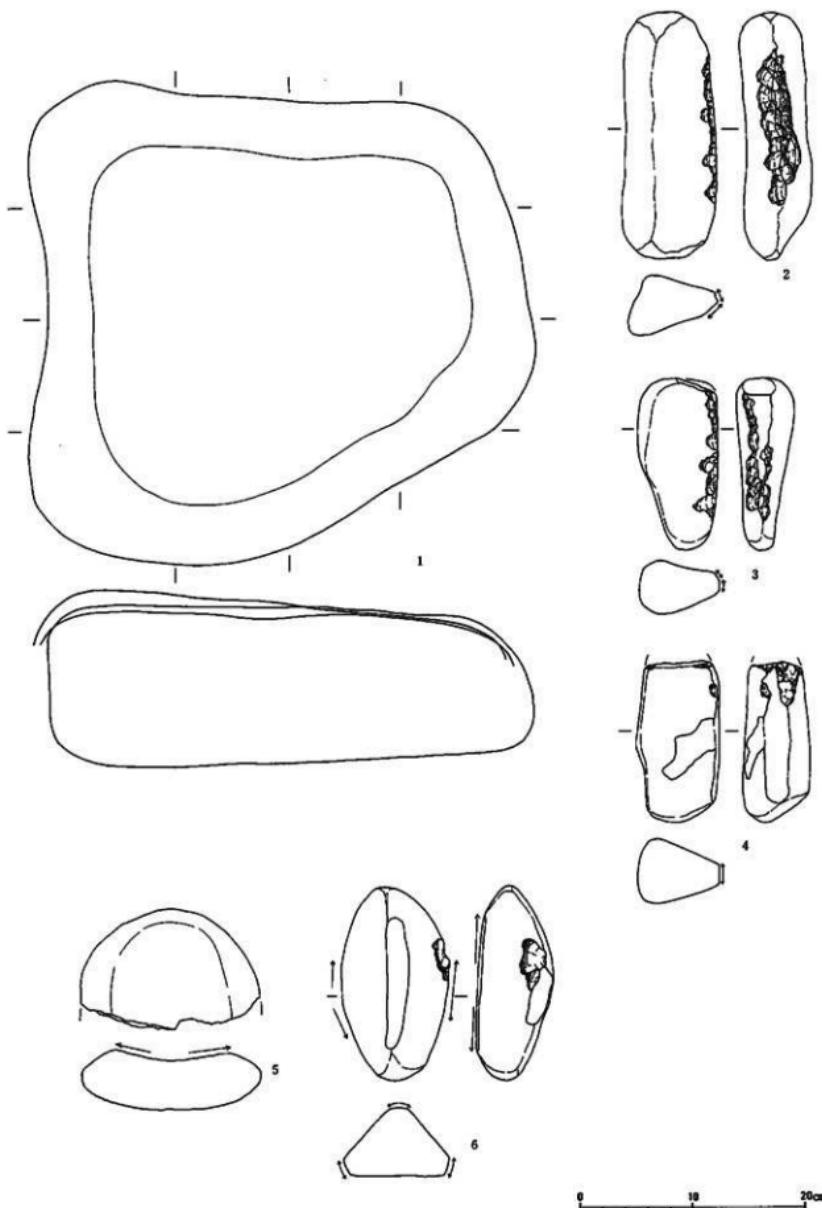
8は7と同じ住居跡から出土した。稜ズリ石と報告されており、粗いスリ面が1cm以内の幅で、敲打による小剥離が見られると報告されている。

9～14は中期初頭に下るが、類例として示す。9～11は敲打による剥離面と敲打面を持つ石器。12・13は8と同様の使用の痕跡を有する。14も8と同様であるが、その使用面が半月形を呈するものである。

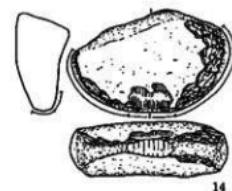
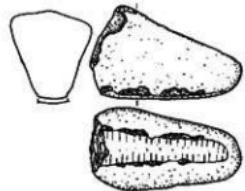
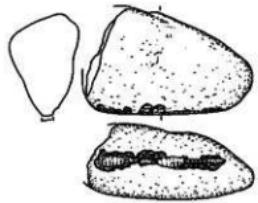
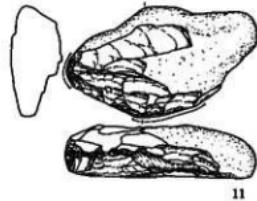
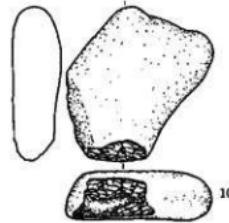
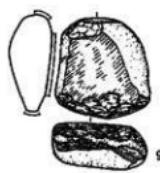
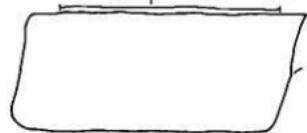
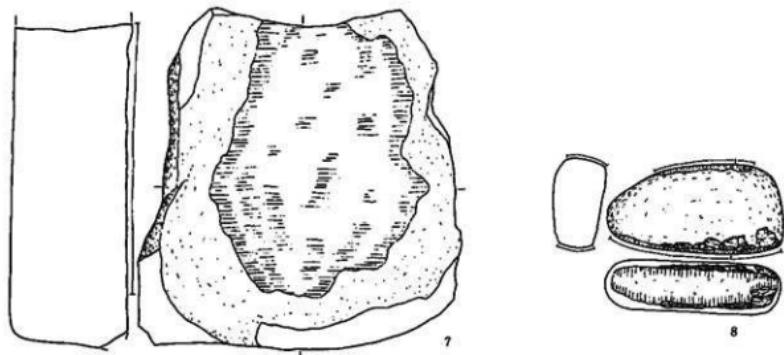
以上、當代遺跡と桂野遺跡資料を紹介した。このように、前期後半から中期初頭にかけては、擦りとも叩きとも思える資料が、石皿や台石といっしょに確認されることがしばしばある。

さて、今あらためて紹介した石器で注目されるのは、1の台石と2～4の敲石のセットと、5の石皿と6の稜磨石が同一の住居で確認されたことである。2～4のようなタイプの敲石自体類例がないのであるが、今回は幸運にもその受けとなる台石がセットで確認されたわけである。5・6が磨りによる製粉作業を示すものであるならば、1と2～4はそれとは明らかに違った作業が行われていたことを示すものである。県内では、花鳥山遺跡や天神遺跡など諸磯b・c式期の大規模な集落が調査されているものの、このような石器の明瞭な使い分けを示した例はおそらく初めてであろう。

1の台石は、第12図に使用面のエレベーションを示したが、いわゆる中期的石皿のような平均的凹面ではなく、表面には拳大程度の小規模な瘤みがいくつか存在する。このままではなかなか理解しにくいため、今回写真撮影に際し、可能な限り使用面の真横ちかくまでライトの位置を下げて、しかも90度方向を変えてライティングして撮影を試みた。その写真は図版に示した。この、ライトの方向を変えた2枚の写真で黒く浮き出た部



第26図 當代遺跡台石・敲石・石皿・磨石



0 10 20cm

第27図 桂野遺跡台石・敲石・磨石

分の縁を合成すると直径8~10cm程度の窪みの存在が確認できる。今回の撮影では、確實なところは2ヶ所、窪みのカーブの一部が確認できる部分が2ヶ所それぞれ確認できた。ライトの角度をより細かく変えながら、また、位置をもっと下げれば、今回の資料よりさらにはっきり確認できるだろうし、別の窪みも確認できるはずである。このように、同じ使用面の中にも、7・8ヶ所の窪み面の存在が確認される。このことはこの台石が「擦り」ではなく「叩き」として使用されたことを示している。

次に、2~4についてである。前述したように、2が叩きだけの状態、3は潰れがみられ始めた段階、4は潰れが広がって磨石の磨り面と見紛う程の状態になっている。これらはいずれも断面三角形の河床礫を用いたものであるが、三角形でも極端な鋭角部を有する二等辺三角形にちかい形状で、その鋭角部を使用している。最も手に持ちやすい底辺部分を握って台石に叩きつけた状況が想定できるが、2~4は各段階を示しているのである。この3種が使用の過程を示しているわけであり、2→3→4という変遷をたどることになるのであろう。

もう一つの注目点は、これらが一軒の住居に同時存在したのであるから、台石上で行われたであろう作業には、このようなそれぞれの段階の石器が必要であったことになる。この3種の石器の違いは叩く際の接地面の幅である。叩きという行為からは、堅果類や根茎類の潰し、あるいは木本の樹皮・繊維の取り出しなどが想起されるが、このような使い分けが行われていたのであろう。なお、台石周辺にとどまらず、住居内からはフレイク・チップなどは確認されていないため、石器作成との係わりは考えられない。

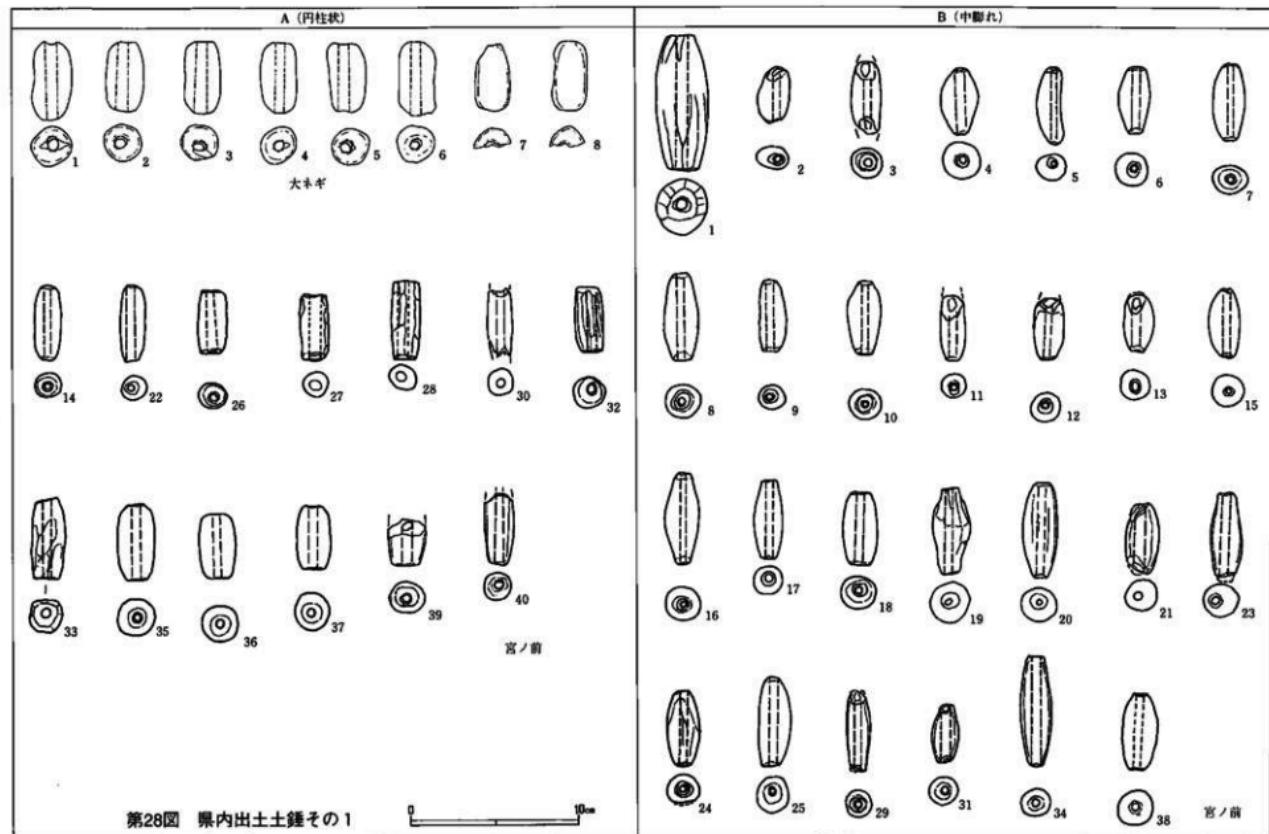
さらにこのような形態の敲石の確認である。桂野遺跡を調査した保坂康夫がすでにこの形態の敲石に言及（埋文センター199集：桂野遺跡）しているが、現状ではあまりに類例が少ない。鋭角二等辺三角形の鋭角部のみ使用された石器で磨石あるいは稜磨石と報告されたものについては、それが本当に擦りによって形成された面であるのか再度検証してみる必要がある。破損の有無はもちろん、破損がない場合にも使用面との境界部分の状況を確認することで検証は可能なはずである。ひとまず、そのことを指摘しておきたい。

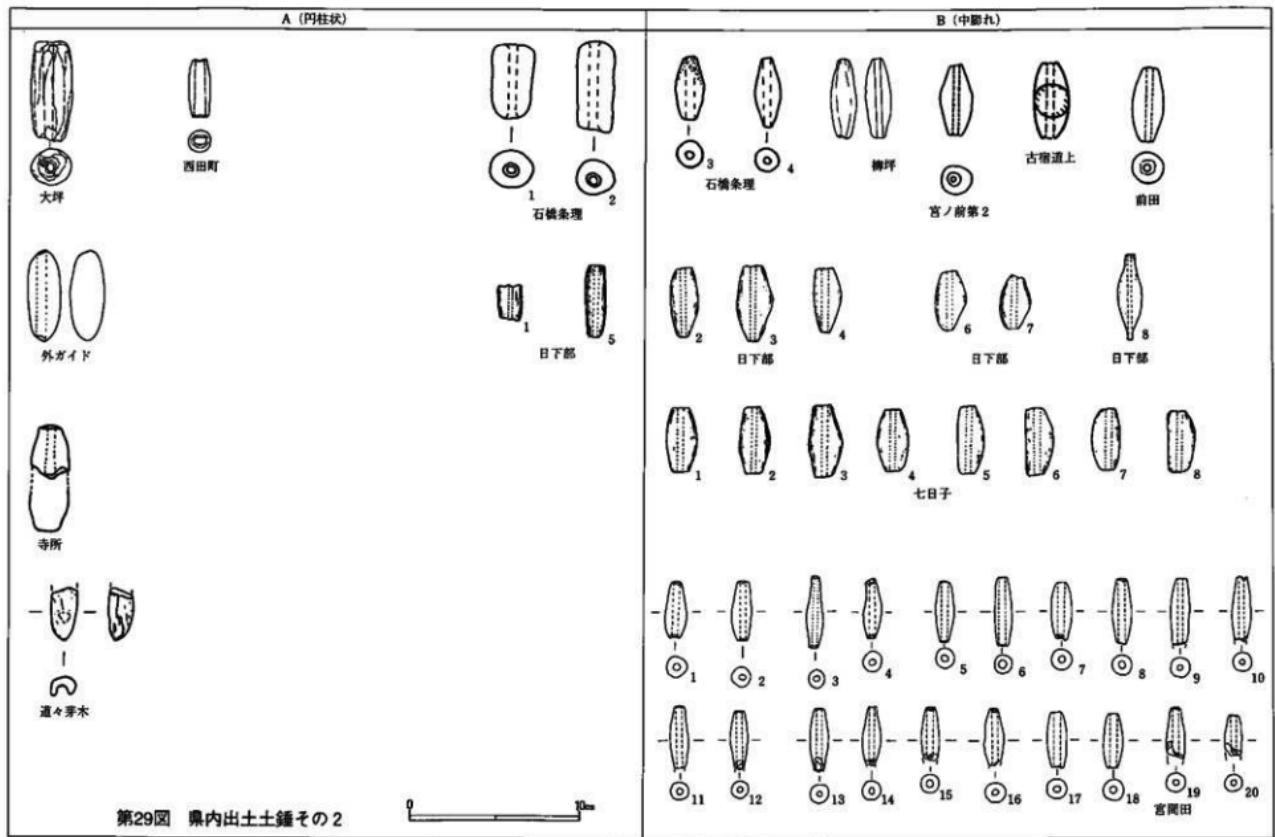
ところで、このように述べておきながら、一方で1の台石に見られる8~10cm程度の円形の小さな窪みと2~4の敲石とが結びつかない。このような大型の石器でまっすぐ敲いた場合、このような小さな窪みが形成されるとは考え難い。台石の小窪みに比べ、敲石が大きすぎるのではないかと思われるからである。桂野遺跡の、先端が狹まる形態の9~11や半月形の14などであれば小さな窪みは形成される可能性があるが、2~4では直線である接地部分が大き過ぎる。台石は、小窪み以外の部分も当然使用面になっているわけであり、2~4は窪みを形成するような使用法ではないと同時に、同一使用面に小窪みが存在しても使用上問題ないことになる。小さな窪みは、むしろこのような形態の敲石とは別の敲石、すなわち通常見られる断面四角形の磨石の両端部に敲きの痕跡が見られるものや、棒状もしくはスタンプ状の底面を叩き面として使用した飛鏢のトチむき石タイプによって形成されたと考えたい。今回の調査では、本来存在すべき打製石斧や磨製石斧、さらには通常の磨石等も全く出土しなかった。残されたものが台石をはじめとしたこれらの石器群であったわけである。そうしてみるとさらに多くの石器が本来この住居に存在したことは疑いなく、台石に窪みを形成させるような別タイプの敲石が存在していた可能性が強い。

次に大ネギ遺跡の土錘について触ることにする。今回の調査で、土錘は完形6点と半分割2点の合計8点が出土した。これまで平安時代の土錘は県内各地で散見されており、この段階で県内資料を集成し今後の基礎資料としておきたい。

筆者の管見に触れたところでは、報告済みの資料は本遺跡を含め15遺跡97点が確認できた。これらの確認資料を第27・28図に集成した。これには遺構外から単独で確認されたものも含まれるが、多くが遺構内からの出土で、すべて平安時代、それも10世紀頃に位置付けられるものばかりである。この状況から、ここに集成した資料すべてを平安時代と考えて差し支えないものと考える。

集成図に示したように、これらの資料は形態的に大きく二つに分けられる。A種は円柱状であり、胸部の膨らみが全くないか、あっても強くないグループである。これに対しB種は中膨れ形態で、胸部の最大径と上下面の





第29図 県内出土土錘その2



径との差が大きいグループである。今回はA種とB種とをあくまで見た目で分類しただけであるが、おそらく両者は最大径と上面面積の比率を出すことによって、数値で明確に分けられるものと思われる。今回の調査で出土した本遺跡の土錘はすべてA種になるが、県内全体では圧倒的にB種が多い。

土錘が複数出土しているのは石橋条理・宮ノ前・宮間田・日下部・七日の各遺跡と本遺跡の5遺跡である。この5遺跡で84点、ほぼ9割となる。このうちA・B両種が出土しているのは宮ノ前・石橋条理・日下部の3遺跡で、なかでも最も多出している宮ノ前遺跡ではA種とB種の比率がほぼ1:2となっている。石橋条理では半々、日下部遺跡では1:3である。本遺跡はA種のみ、宮間田遺跡はB種のみである。このように見てみると、本遺跡のあり方が例外であると言えよう。

ところで、このような形態差は意図的なものなのであろうか。つまり意識して円柱形態と中膨れ形態を作っているのかという疑問を感じるのである。宮ノ前遺跡の14は30号住居跡からまとまって出土した15点のうちの一つであり、少なくとも使用段階ではこの差は問題ではなかったことが窺える。しかも、土錘という製品はすべてが手捏ねで製作されたもので、一定の規格で機械生産されているわけではないことから、製作段階での形態差は当然生じ得る。宮ノ前遺跡のA種とB種の存在は、製作段階で生じた形態差と考えられないこともない。しかし、その一方で、石橋条理の4点がきわめて対照的である。報告書で1・2は土製管玉、3・4は土製橐玉と記載されたように、形態状の差異がはっきりしている。形態・大きさとも明らかに違うこの両者は掘立柱建物跡から出土しているとのことで、同時存在したのであろうが、ここまではっきりした形態差からは、それが意識して製作された可能性を考えざるを得ない。

形態差と同時に大きさも検討しなければならないが、こちらは非常にはっきりした意図を持って作成されていると考えられる。宮ノ前遺跡の1は今回確認した資料中最大で、長さ8cm、重量81gである。他の資料は20g前後のものが多く、本遺跡資料も20g程度である。重量記載のないものがほとんどであるため、資料は少ないが、実測図から判断する限りこのクラスが主体であろうと想像される。しかし、宮間田遺跡の一群は極端に小さく軽い。小さい上に細長いのが特徴で、重量は4~5gと極端に軽い。この重量は、県内では縄文時代の土器片鱗でも最も小型のものと同程度である。当然これらは意図的に製作されたものと考えられ、現状でも大小3種類の存在が確認できる。用途による使い分けが行われていたのであろう。

さて、これらの土錘の出土状況であるが、宮ノ前遺跡では30号住居跡で中央やや南寄りの床面直上からまとまって、同62号住居跡で北・西壁下の床面直上レベルから、宮間田遺跡では18号住居跡床面直上から3点出土、同19号住居跡で覆土上層から中層にかけて、七日の遺跡では4号住居跡カマド内とその北東1m付近で2個出土している。一つの遺構から複数出土した例自体が少なく、記載が不充分である場合もあり、「良好な出土例」はなかなか確認できないが、上記の例からは住居内からの出土が圧倒的である。重量は前述したとおり20g程度と4g程度に分かれる。宮ノ前遺跡30号では15点、同62号では3点、宮間田遺跡18号では覆土を含め11点、同19号では16点、七日の遺跡4号では8点がまとまって出土している。土錘は網の錘と理解されるが、網の場合、まとまりの数値があまりに少ないと、とくに宮間田遺跡にみられる重量の軽さが気にかかる。最もまとまっている宮間田遺跡19号例でも16点であり、これで網の錘として十分な数と言えるのであろうか。また、僅か4g程度の重量で錘としての機能を充分果たし得るのであろうか。出土状況と量からは、縄文時代の打欠石錘と同様の疑問を感じる。ただ、縄文時代の打欠石錘の場合、つねにもうひとつ可能性が指摘されるのが縛物錘であるが、今回の平安時代の土錘においては、宮間田遺跡の他の住居跡でも出土しているように、10cm程度の棒状の自然縛を縛物錘として使用している例が確認されていることから、その可能性は除去できると考えられる。とすれば、用途は漁網錘に限定され、その場合、とくに小型・軽量の宮間田タイプは、湖沼や、河川では流れのない部分での網漁が想定されよう。

本遺跡では、溝から廃棄された土器類と共に土錘が出土している。半分割資料の存在からは土錘そのものの廃棄も考えられなくもないが、少なくとも6点は完形であり土錘そのものの廃棄は考え難い。8点が、最大6mの距離を置いて出土していることからすれば、網そのもの、あるいは結わえられたまでの錘部分の廃棄と

表2 県内出土土器一覧表

所在地	遺跡名	番号	出土位置	重量	図・番号	文 献
甲府市	大坪			37	39-35	市教委 大坪遺跡Ⅲ
韮崎市	前田				34-14	市教委 前田遺跡
一宮町	西田町		43溝		62-12	町教委 西田町遺跡
甲府市	道々茅木				51-154	埋文センター 197集 久保田・道々茅木
境川村	石橋条理	1	2号掘立		12-1	埋文センター 3集 石橋・藏福・仮ノ下
		2	2号掘立		12-2	
		3	2号掘立		12-3	
		4	2号掘立		12-4	
韮崎市	宮ノ前第2		3号溝状構造		27-8	市教委 宮ノ前第2・北堂地
牧丘町	古宿道上					甲斐考古13-1
大月市	外ガイド		確認面		10-13	埋文センター 117集 外ガイド
長坂町	柳坪				213-2	埋文センター 13集 柳坪
大泉村	寺所		13号住居跡		30-1390	埋文センター 27集 寺所
韮崎市	宮ノ前	1	10号住居跡	81.1	323-1	市教委 宮ノ前
		2	30号住居跡	7.3	323-2	
		3	30号住居跡	11.1	323-3	
		4	30号住居跡	16.2	323-4	
		5	30号住居跡	11.9	323-5	
		6	30号住居跡	15.2	323-6	
		7	30号住居跡	15.3	323-7	
		8	30号住居跡	20.8	323-8	
		9	30号住居跡	9.5	323-9	
		10	30号住居跡	16.2	323-10	
		11	30号住居跡	7	323-11	
		12	30号住居跡	12.1	323-12	
		13	30号住居跡	8.8	323-13	
		14	30号住居跡	10.2	323-14	
		15	30号住居跡	13.3	323-15	
		16	30号住居跡	20.7	323-16	
		17	35号住居跡	11.5	323-17	
		18	40号住居跡	17.6	323-18	
		19	42号住居跡	20.2	323-19	
		20	50号住居跡	22.8	323-20	
		21	62号住居跡	14	323-21	
		22	62号住居跡	10.2	323-22	
		23	62号住居跡	18.1	323-23	
		24	63号住居跡	14.1	323-24	
		25	69号住居跡	24.2	323-25	
		26	87号住居跡	13.6	323-26	
		27	120号住居跡	12.7	323-27	
		28	120号住居跡	14.5	323-28	
		29	255号住居跡	9.4	323-29	
		30	293号住居跡	8.3	323-30	
		31	310号住居跡	7.3	323-31	
		32	318号住居跡	13.2	323-32	
		33	364号住居跡	20.2	323-33	
		34	409号住居跡	15.3	323-34	
		35	10号掘立	21.9	323-35	

		36	10号掘立	17.7	323-36	
		37	10号掘立	17.4	323-37	
		38	11号溝	19.6	323-38	
		39	1号溝状遺構	10.6	323-39	
		40	表採	13.3	323-40	
武川村	宮間田	1	18号住居跡		11-17	村教委 宮間田 1986
		2	18号住居跡		11-18	
		3	18号住居跡		11-19	
		4	18号住居跡		11-20	
		5	19号住居跡	4.7	27-10	村教委 宮間田 1988
		6	19号住居跡	4.9	27-11	
		7	19号住居跡	4.1	27-12	
		8	19号住居跡	4.3	27-13	
		9	19号住居跡	4.2	27-14	
		10	19号住居跡	3.8	27-15	
		11	19号住居跡	3.5	27-16	
		12	19号住居跡	3.5	27-17	
		13	19号住居跡	4.3	27-18	
		14	19号住居跡	3.4	27-19	
		15	19号住居跡	3.2	27-20	
		16	19号住居跡	4.4	27-21	
		17	19号住居跡	4.3	27-22	
		18	19号住居跡	3.5	27-23	
		19	19号住居跡	3.1	27-24	
		20	19号住居跡	2.4	27-25	
山梨市	日下部	1	1号住居跡		21-31	市教委 日下部 1987
		2	2号住居跡		25-36	
		3	2号住居跡		25-37	
		4	2号住居跡		25-38	
		5	8号ピット		40-3	
		6	10号住居跡		45-11	
		7	10号住居跡		45-12	
		8	溝跡A		66-4	
七日子		1	4号住居跡		114-8	市教委 日下部 1987
		2	4号住居跡		114-9	
		3	4号住居跡		114-10	
		4	4号住居跡		114-11	
		5	4号住居跡		114-12	
		6	4号住居跡		114-13	
		7	4号住居跡		114-14	
		8	4号住居跡		114-15	
御坂町	大ネギ	1	溝	25	25-174	埋文センター 211集 當代遺跡・大ネギ遺跡
		2	溝	22	25-175	
		3	溝	20	25-176	
		4	溝	21	25-177	
		5	溝	20	25-178	
		6	溝	22	25-179	
		7	溝	11	25-180	
		8	溝	9	25-181	

いうかたちで廃棄されたのかもしれない。いずれにしても、宮間田遺跡で確認された住居覆土中への一括廃棄という状況とは違った、他の土器類とともに廃棄された状況が確認されることになる。

以上、當代遺跡の石器群と大ネギ遺跡の土錐について触れてみた。両遺跡とも、調査面積・遺構数ともに小規模なものであったが、それぞれに問題を提起してくれた。同じような遺跡だと、大した遺跡ではないという言い方もしばしば耳にするし、担当者もそのようなイメージで調査に入るケースもあるだろう。今回の調査で得られた成果はまさに同じ遺跡は存在しないということ、予想もしない遺構・遺物に出くわすことなど、あらためて調査規模の大小にかかわらず遺跡の価値は等しいことを示してくれた。このことを感謝しつつまとめとしたい。

写 真 図 版



1 試掘風景



2 試掘風景



3 32号トレンチ



4 36号トレンチ



5 59号トレンチ

図版 2



1 60号トレンチ



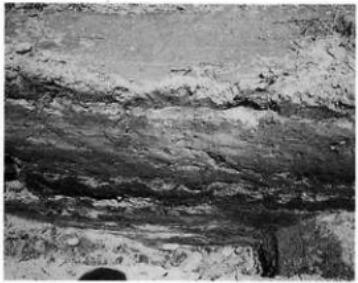
2 62号トレンチ



3 91号トレンチ弥生土器出土状況



4 91号トレンチ弥生土器出土状況



5 111号トレンチ断面



6 125号トレンチ断面



1 當代遺跡遺物出土狀況



2 炉と台石



3 炉断面



4 炉と台石

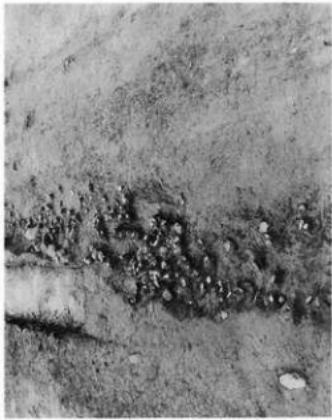


5 炉断面



6 炉断面

图版 4



1 大牛背溝遺物出土狀況



2 大牛背溝跡遺物出土狀況



3 大牛背溝跡遺物出土狀況



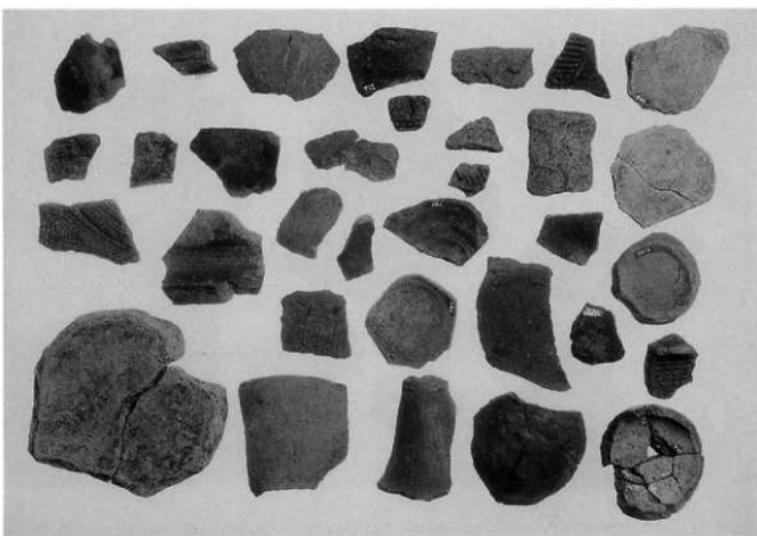
4 大牛背溝跡遺物出土狀況



5 溝完掘狀況



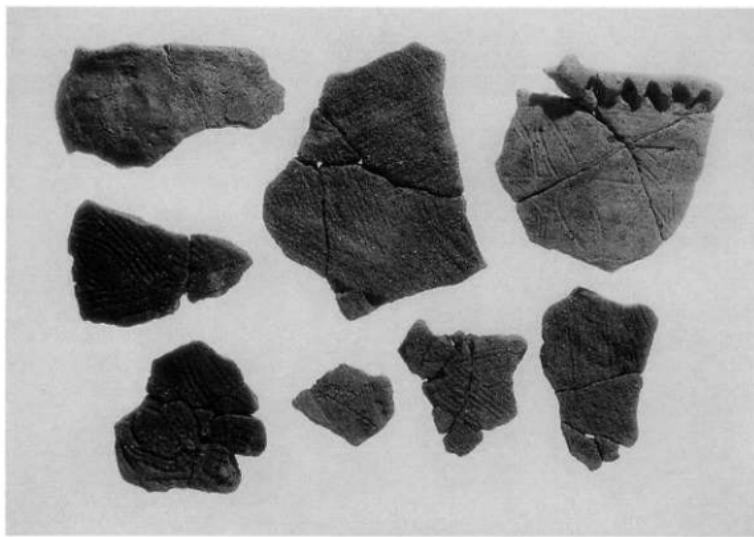
1 91号トレンチ弥生土器



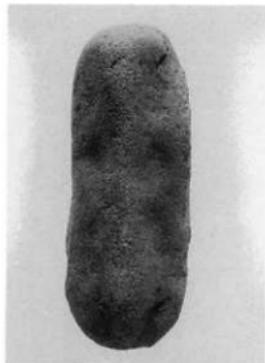
2 トレンチ出土遺物



1 當代遺跡住居跡爐體土器



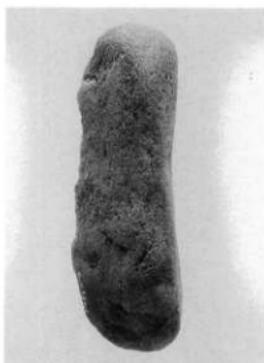
2 當代遺跡住居跡出土土器



1 a 當代遺跡住居跡出土敲石



1 b 當代遺跡住居跡出土敲石



1 c 當代遺跡住居跡出土敲石



2 a 當代遺跡住居跡出土敲石



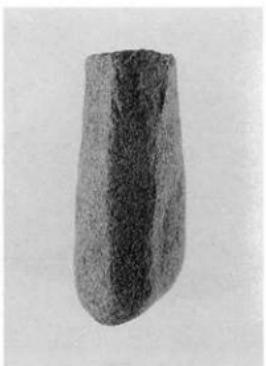
2 b 當代遺跡住居跡出土敲石



2 c 當代遺跡住居跡出土敲石



3 a 當代遺跡住居跡出土敲石

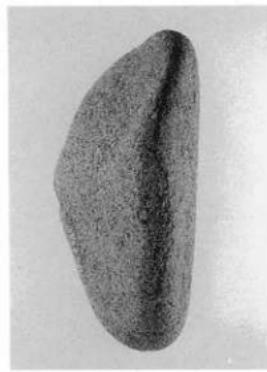


3 b 當代遺跡住居跡出土敲石

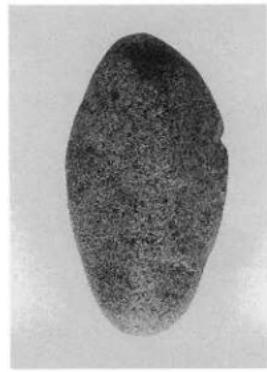


3 c 當代遺跡住居跡出土敲石

図版 8



4 a 當代遺跡住居跡出土稜磨石



4 b 當代遺跡住居跡出土稜磨石



4 c 當代遺跡住居跡出土稜磨石



5 台石と敲石



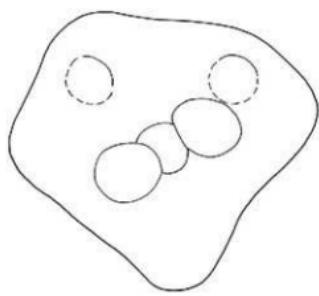
6 石皿



7 a 台石に見られる小さな窪み



7 b 台石に見られる小さな窪み

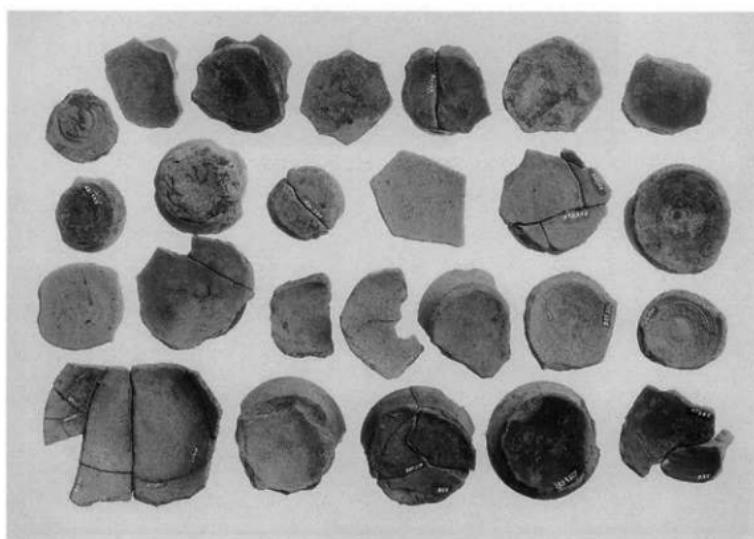


7 c 台石に見られる小さな窪み

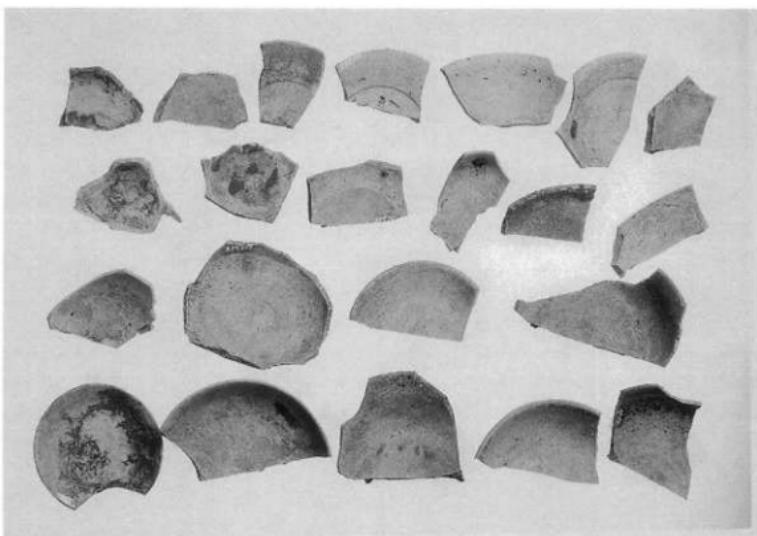
図版10



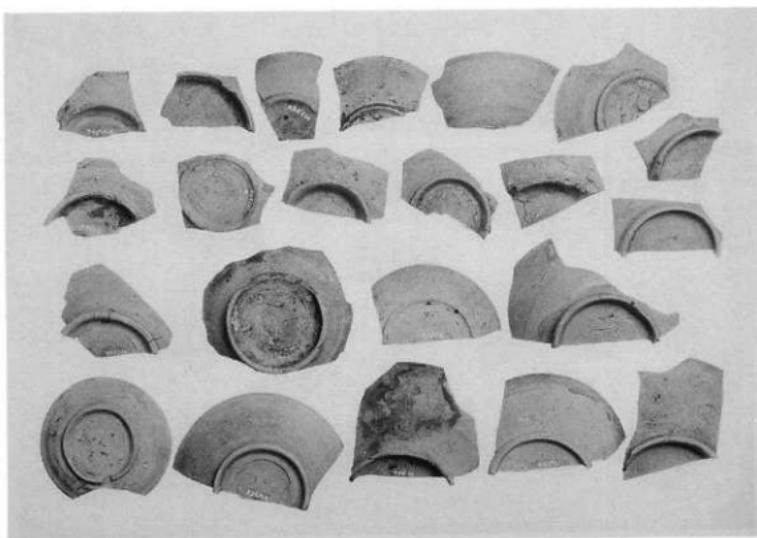
1 a 大ネギ遺跡溝出土土師器



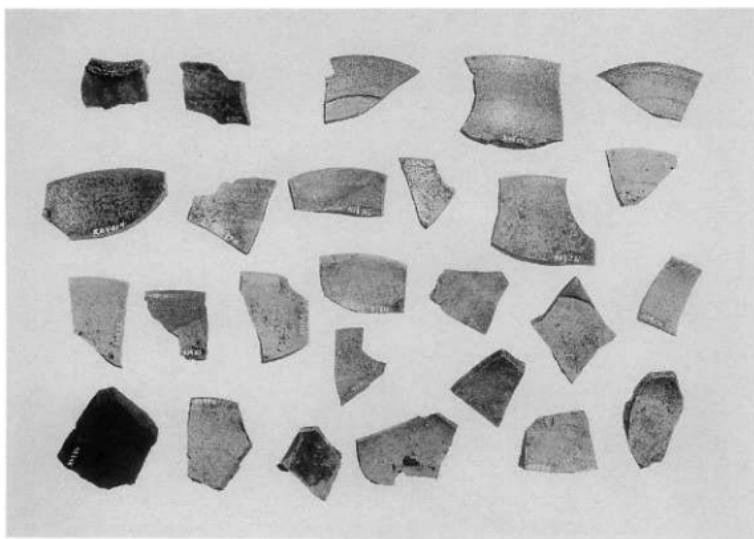
1 b 大ネギ遺跡溝出土土師器



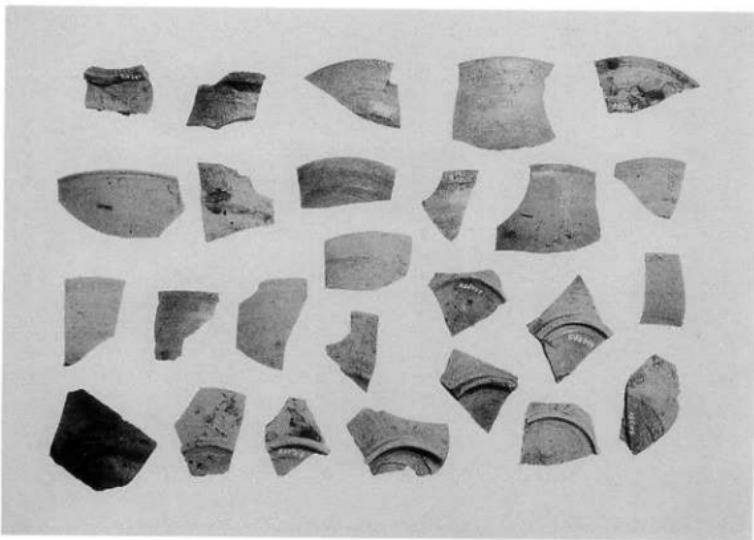
2 a 大ネギ遺跡溝出土灰釉陶器



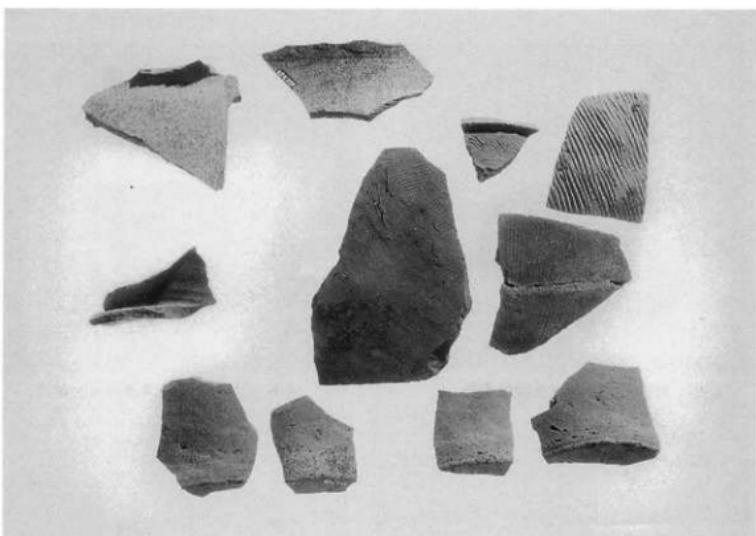
2 b 大ネギ遺跡溝出土灰釉陶器



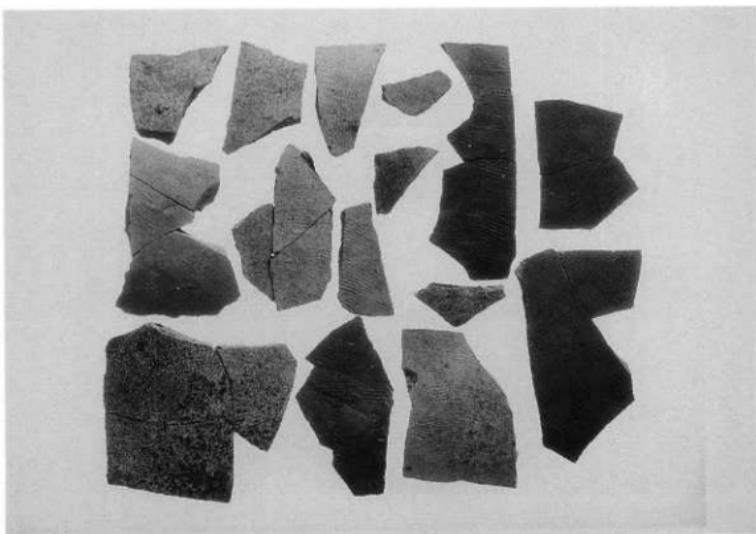
3 a 大ネギ遺跡溝出土灰釉陶器



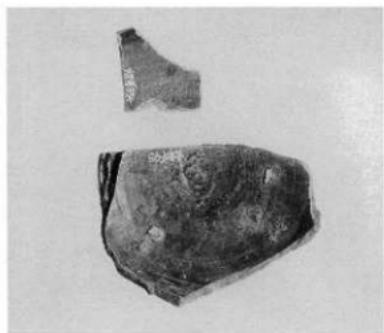
3 b 大ネギ遺跡溝出土灰釉陶器



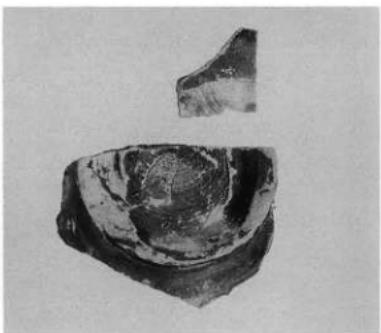
4 大ネギ遺跡溝出土須恵器



5 大ネギ遺跡溝出土須恵器



6 a 大ネギ遺跡溝出土綠釉陶器



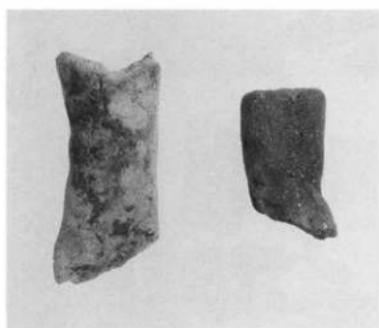
6 b 大ネギ遺跡溝遺物出土状況



7 大ネギ遺跡溝出土ミニチュア土器（薬壺）



8 大ネギ遺跡溝出土土錘



9 大ネギ遺跡溝出土不明土製品

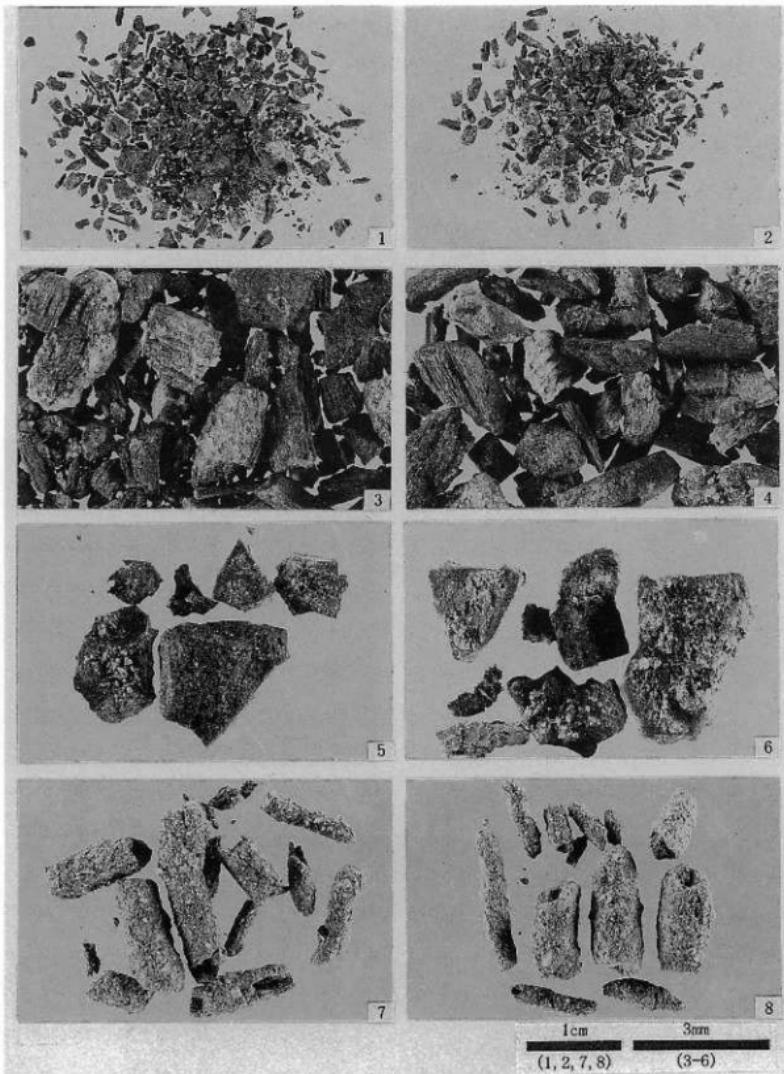


10 大ネギ遺跡溝出土水晶製石錘



11 大ネギ遺跡溝出土砥石

図版16



1. 炭化材（試料A）
3. 炭化材（試料A）
5. 不明炭化物（試料A）
7. 高師小僧（褐鉄鉱）（試料A）

2. 炭化材（試料B）
4. 炭化材（試料B）
6. 不明炭化物（試料B）
8. 高師小僧（褐鉄鉱）（試料B）

報告書抄録

ふりがな	とうだいいせき おおねぎいせき
書名	當代遺跡 大ネギ遺跡
副書名	山梨県立博物館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書
巻次	(全1冊)
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第211集
著者名	長沢 宏昌・大柴 鉄哉
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL. 055-266-3016
発行者	山梨県教育委員会
発行日	2003年3月28日

所收遺跡名 所	ふりがな 在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号					
當代遺跡	山梨県東八代郡御坂町成田 大ネギ遺跡	19322 等當代 1564外	35° 38° 10°	138° 39° 40°	2002(H14)年 8月1日～ 8月27日	約800m ²	山梨県立博物館（仮称）建設に伴う発掘調査

所收遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
當代遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1	縄文土器・石器など	縄文時代前期末の住居跡
			土坑 1	土師器・須恵器	
大ネギ遺跡		平安時代	溝跡 1	土師器・須恵器・灰釉陶器など 土製品（土錐）	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第211集

當代遺跡・大ネギ遺跡

— 山梨県立博物館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書 —

2003（平成15）年3月24日 印刷

2003（平成15）年3月28日 発行

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社少国民社

